

評 言語を記する者をば、之を 雜毒、心に入つて 正知見を礙ふと謂ふ。世間讀書の人、文字を記すること多きも、便ち融化すること能はず、何ぞ況んや出世の法を究むるに、肯へて他人の涎唾を食はんや。

玄沙云く、一般繩牀に坐する和尚ありて、善知識と稱す。問着すれば身を揺かし手を動かし、眼を點じ舌を吐き、瞪つて視る。

評 此れ等の流は、通身これ魔なり、通身これ病なり。臘月三十日に至らば、未だ闇を免れ去らざることたらん。

玄沙云く、更に一般のものあり、昭々靈々たる靈臺の智性、見を能くし聞を能くす、五蘊身田の裏に向つて主宰と作ると説く。恁麼に善知識と爲つて大いに人を 賺す。知るや。我れ今汝に問はん、汝若し昭々靈々、是れ汝が眞實なりと認めば、甚麼と爲て 瞌睡する時は、又 昭々靈々と成らざるや。若し瞌睡する時不是ならば、甚麼と爲て昭々の時あるや。汝還つて會すや。這個をば喚んで、賊を認めて子と爲すと作す。是れは生死の根にして妄想の緣氣なり。

評 此れは是れ精魂を弄する漢なり。瞌睡する時既に主と作り得ず、生死到來せば、作麼生か 折合せん。一生胡亂に做し去る、豈但人を哄するのみならんや、皆自ら 哄するのみ。

- ① 雜毒。いろいろの三毒五欲に迷はざる妄想。
- ② 正知見。眞正の佛知見をいふ。
- ③ 點眼。眼をつくるにて。點は點する也。
- ④ 賺。だます。
- ⑤ 瞌睡。れむりふかし。
- ⑥ 昭昭靈靈。ありありと見聞知覺すること。
- ⑦ 折合。なんとしてか受合がでざるぞ。
- ⑧ 哄。大に笑ふこと、たかわらひなど。

玄沙云く、汝今他の五蘊の身田の主宰を出すことを得んと欲せば、但だ汝が秘密金剛の體を識取せよ。古人汝に向つて道ふ、圓成正遍にして、沙界に遍周す」と。

評 秘密金剛の體、即ち圓成正遍にして、沙界に遍周す、分明に汝に向つて道ふ、須らくこれ全身 拶入して始めて得べし。

玄沙云く、佛道 閑曠にして、程途あることなし、無門は解脱の門、無意は道人の意、三際に在らず、故に昇沈すべからず、建立眞に乘く、造化に屬するに非ず。

評 若し此の意を會得せば、纖毫の功行を費さずして、立地に成佛せん。還つて箇の成の字を多了せよ。

玄沙云く、動は則ち生死の本を起す、静は則ち昏沈の郷に醉ふ。動靜雙泯するも、即ち空亡に落つ、動靜雙收するも、佛性を 顛頂す。

評 行人多く動を厭ふて静を取る、静久しうしては復た動を思ふ。須らく眉毛を 剔起して、動靜の窠臼を打破すべし、始めて是れ道人の用心なり。

玄沙云く、必ず須らく塵に對し境に對して、枯木寒灰の如くにし、時に臨み用に應じて、其の宜しきを失せざるべし。鏡諸像を照して、光輝を亂らす、鳥空中に飛んで、空色を雜せず。

- ① 沙界。世界の無數なる、沙の數にたとへて沙界といふ。
- ② 拶入。拶は逼るなり。
- ③ 閑曠。ひろびろとせる事。
- ④ 三際。過去現在未來をいふ。
- ⑤ 造化。天然自然に成ること。
- ⑥ 纖毫。極めて少きこと。
- ⑦ 顛頂。馬鹿にして、許くこと。
- ⑧ 剔起。のぞく。

評。枯木寒灰の如しとは、蓋し無心なり、其の宜しきを失せずとは、蓋し物に應ずるなり、豈、灰心泯智の者と日を同じうして語らんや。其の光輝を亂らす、空色を雜せずと、云云は自ら彼なり、我に於て何か爲ん。

玄沙云く、所以に十方に影像なく、三界行蹤を絶す、往來の機に墮せず、中間の意に住せず、箇の中、纖毫道を盡さずんば、即ち魔王の眷屬と爲る。句前句後、是れ學人の難處なり、所以に一句天に當る、八萬門永く生死を絶す。

云云。この云云已下は兼法師の涅槃無名論の語なり。即ち「絃自彼、於我何爲」と。

評。此の語は貴きこと一句當天八萬門に在り、盡十方世界、纖毫の空缺の處無く、纖毫の影像無く、纖毫の行迹無し。謂つべし、光燦々活潑々と、佛祖衆生安着するに處没し。生死の二字、是れ阿誰か恁麼に道ふや。

玄沙云く、直饒秋潭の月影、靜夜の鐘聲、扣擊に隨つて以て虧くることなく、波瀾に觸れて散せざるが如くなるも、猶ほこれ生死岩頭の事なり。評。坐禪の人、萬に一りも恁麼の田地に到らず、到り得るも尙ほ是れ生死岩頭の事なり。須らく是れ自ら個の活路を尋ねて、始めて得べし。玄沙云く、道人の行處は火の氷を銷して、終に却つて氷と成らず、箭既に弦を離れて、返回の勢なし。

きが如し。所以に牢籠すれども肯へて住まらず、呼喚すれども頭を回らさず、古聖も安排せず、今に至つて處所なし。評。道人の心、合に是くの如くなるべし、但だ此の段を將つて、細抹し將ち來らば、自然に省力あらん。沾連すること、些兒も得ず、若し識心を將つて湊泊せば、正に因地眞ならざれば、果迂曲を招くと謂ふ所なり。

玄沙云く、今時の人、箇の中の道理を悟らず、妄に自ら事に涉り塵に涉り、處々染着し、頭々繫絆す。縦ひ悟るとも、則ち塵境紛紜、名相不實なり。評。處々染着し、頭々繫絆することは、只だこれ究心切ならず、命根斷せず、肯へて死し去らざればなり。眞正の參學の人は、蠱毒の郷に過ぐるに、水も也た一滴に沾着すべからざるが如くにして、始めて箇の徹頭を得ん。玄沙云く、便ち心を疑念を斂め、事を攝し空に歸せんと擬して、目を閉ち睛を藏して、纔かに念起ることあれば、旋々に破除し、細想纔かに生ずれば、即便ち退捺す。此くの如くの見解は、即ち是れ落空亡の外道、魂不散底の死人、冥冥漠々として無覺無知なり。耳を塞いで鈴を偷む、徒に自ら欺誑す。

- ① 細抹。こまかくくたく。
- ② 省力。悟入の力。
- ③ 沾連。うるほひつらなる。
- ④ 些兒。すこしも。
- ⑤ 識心。意識、安心。
- ⑥ 因地。此語以下八字は、楞嚴經に出づ。
- ⑦ 蠱毒。毒藥を以て人を害するを云ふ。
- ⑧ 旋旋。めぐりめぐる。
- ⑨ 退捺。とどめおす事。
- ⑩ 落空亡。此註二十二頁脚注①を見よ。
- ⑪ 冥冥。くらきこと。
- ⑫ 漠漠。聲なきこと。
- ⑬ 塞耳偷鈴。故事は淮南子に出づ。愚者自ら欺きて、人を誑せりとなすも、却つて人に嘲らるゝに譬ふ。

評。病は、疑情を起さず、公案を究めず、肯へて全身入理せず、只だ是れ識心を將つて邊捺する所に在り、縦ひこれ澄々湛々たるも、畢竟命根斷せずんば、終にこれ 做工夫の人にあらず。

玄沙云く、仁者、祇だ長く生死の 愛網を戀ふこと莫れ、善惡の業に拘はり將ち去られて、自由の分なし。饒ひ汝、身心を鍊り得て、虚空に同じうし去り、饒ひ汝 精明 湛不搖の處に到るも、識陰を出でず。古人喚んで急流の水の流急なれども、覺えず妄りに 恬靜と爲るが如しと作す。

評。識心斷せずんば、身心を鍊り得て虚空の如くすとも、終に惡業に牽引し去らる。精明 湛不搖の處、正に是れ識陰なり。如何が生死を免れ得ん。總じて之を言はゞ大理を究徹せざれば、悉くこれ虛妄なり。

玄沙云く、恁麼の修行、盡く他の 輪廻を出づることを得ず、依前として輪廻し去らる、所以に道ふ、「諸行無常」と、直に是れ三乗の功果の是くの如く畏るべきも、若し道眼無ければ、亦究竟ならず。

評。上の數段の法語を總收するに、皆究竟に非ず、三乗の行人 縦ひ 六度萬行を行するも、皆生滅の法なり、實際の理地に於て、且喜すらくは 沒交涉。

① 做。作と同じ。  
② 受網。受着の業網。  
③ 精明。一精明は六和合となる、これ以下は楞嚴十卷の意に依る。  
④ 湛不搖。恒常と云ふ。  
⑤ 識陰。八識五陰の略也、共に迷の境也。  
⑥ 恬靜。しづか。  
⑦ 輪廻。業識に牽引せられて、生死に輪廻すること。  
⑧ 諸行云云。四句偈文の一句也。  
⑨ 六度。六波羅密の譯名にて、波羅密は生死海を度りて涅槃に至るが故に、度といふ。萬行は諸善の行跡をいふ也。  
⑩ 且喜。やれ、うれしやといふ意。  
⑪ 沒交涉。よつてもつかぬと譯す。

① 徑山云く、今時一種の外道あり、自眼明かならずして、只管に人をして死猶狂地に休し去り歇し去らしむ。若し此くの如く休歇せば、千佛の出世に到れども、也た休歇することを得ずして、轉た心頭をして迷悶せしめん耳。

評。肯て疑情を起さざる時は、則ち命根斷せず、命根既に斷せざれば、休するとも亦去らず、歇するとも亦得ず。即ち此休歇の二字、便ち是れ生死の根本なり。縦ひ百劫千生にも、終に了底の日子無けん。徑山云く、又一等の人、人をして縁に隨つて管帶し、情を忘じて黙照せしむ。照し來り照し去り、帶し來り帶し去つて、轉た迷悶を加へて、了期あること無しと。

評。既に能帶の心と所照の境とありて、能所對立す、妄に非して何ぞや。若し妄心を以て參究と爲ば、便ち自心に於て自在を得ず。只だ須く兩頭を坐斷し、能所立せざるときは則ち礙膺の物、桶底の脱するが如くならん。

徑山云く、又一等の人、人に是の事管すること莫れ、但只恁麼に歇し去れ、歇し得來らば、情念生せず、恁麼の時に到つて、是れ 冥然無知なるにあらず、直に是れ惺々歷々なりと教ふ。這般底は更に是れ毒害、人の眼を瞎却す、是れ小事にあらず。

評。只饒ひ惺々歷々に到るも、此れはこれ寂に對するの法にして、參究に非ざるをや。若し參究して直に大事を發明せんと欲せば、既に是くの如くならず、豈毒害に非ざるものならんや。

① 徑山云く、久參先達を問はず、若し眞個に靜ならんことを要せば、須らくこれ生死の心、破不着なるべく、工夫を做して、生死の心、破るゝときは則ち自ら靜ならん。  
 評。疑情發得起するときは、則ち生死の心、凝結して一處に在り、疑情破るときは則ち生死の心破る、此の破るゝ處に於て其の動相を求むるに、了に不可得なり。

疑情發不起に示す警語

工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち行を尋ね、墨を數へ、文字を檢討して、廣く知解を求めんと欲す。佛祖の言教を將て、一串に穿過して都て一箇の印子を作つて、印定す。纔かに一則の公案を擧起すれば、便ち道理の會を作し去る。本參の語頭の上に於ては、疑情を發起すること能はず、人の難問着するに逢ふときは則ち喜ばず、此れはこれ生滅の心にして禪には非ず。或は聲に隨つて應答し、**② 豎指**、**③ 擊拳**、筆を引いて疾く偈頌開示を書して、人をして參究せしむ。亦意味あれば、自ら大悟門を得と謂ふ。殊に知らず、疑情發不起なれば、皆是れ識心の然らしむることを。若し肯へて一念、非なることを知らば、全身放下して善知識に見えて、箇の入路を求むれば則ち可なり。然らずんば生滅の心、勝つこと久しきときは、則ち魔着を成して殆んど救ふべからず。

① 此の一段も大慧の書、答富樫密書に出づ。  
 ② 穿過。穿ち過す也。  
 ③ 印定。しるしとしきめる。  
 ④ 豎指。俱胝と童子の問答。  
 ⑤ 擊拳。童子の受答へ。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、境縁上に於て、厭離を生じ、喜んで寂靜無人の處に到つて坐し去り、便ち得力を覺へ、意思あることを覺ゆ。纔かに此の動處に遇着すれば、心即ち喜ばず、此れは是れ生滅の心にして、禪には非ず。坐久しきときは則ち靜境と相應し、冥然として無知、對を絶し待を絶す。縦ひ禪定を得て疑心不動なるも、諸の小乘と何の異なる所あらん。稍境縁に遇ふときは則ち自在ならず、聲を聞き色を見るときは、則ち恐怖を生ず、恐怖に由るが故に、魔其の便を得、魔力に由るが故に諸の不善を行ふ。一生の脩行、都て益する所なし、皆是れ最初に善く心を用ひず、善く疑情を起さず、肯へて人に見えず、肯へて人を信せずして、靜謐の處に於て、強ひて主宰と作ればなり。縦ひ善知識に遇ふとも、肯へて一念非なることを知らずんば、千佛出世すとも、其れ爾を奈何んせん。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、情識妄想の心を將て遏捺し、妄心をして起らざらしめ、起ることなき處に到るときは、則ち澄々湛々、純清絶點なり。此れ識心の根源、終に破ること能はず、澄湛絶點の處に於て、都て個の工夫を作して理會す、纔に人の痛處を點着するに遇へば、水上に蘆を捺ふるが如く相似たり。此れは是れ生滅の心にして、禪には非ず。蓋し最初肯へて話頭に參じ、疑情を起さざるが爲なり。縦ひ身心を遏捺し得て起さざるも、石の艸を壓すが如し。若し識心を死し得て、斷滅と成し去るも、正に是れ落空亡の外道なり。若し斷滅し去らずんば、境縁に逢はん時、即ち識心を引起せん、澄湛絶點の處に於て、便ち

⑥ 葫蘆。ふくべ、胡蘆とも書く、ものわらひと云ふこと。

聖解を作して、自ら大悟門を得と謂ふ。縦にするときは則ち狂を成し、着するときは則ち魔と成る。世法の中に於て無知を誑妄して、便ち深孽を起し、人の信心を退け、菩提の道を障ふ。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、身心器界を將て、悉く皆空じ去る。空じて管帶なき處、依倚なき處に到つて、身心あることを見ず、世界あることを見ず、内に非ず外に非ず、總に是れ一空なれば、空便ち是れ禪と謂ひ、空じ得去る、便ち是れ佛と謂ふて、行も也たこれ空、坐も也たこれ空、空じ來り空じ去つて、行住坐臥、虚空の中に在つて行くが如し。此れは是れ生滅の心にして、禪には非ず。着せざるときは、則ち頑空と成つて、冥然無知なり。着するときは則ち魔と成つて、自ら謂ふ大いに悟門ありと。殊に知らず、參禪と沒交涉なることを。若し眞に是れ個の參禪の漢ならば、疑情を發起し、一句の語頭、天に倚る長劍の如くならば、其の鋒に觸る、者、即ち喪身失命せん。若し是くの如くならずして、只饒空じ得て、一念不起の時も、只だ喚んで個の空無所知と作さん、究竟に非ざるをや。工夫を做すに、疑情を發し起さず、遂に識心を將て揣摩し、古人の公案を把つて、胡亂に穿鑿し去つて、是れを全提と謂ひ、是れを半提と謂ひ、是れを向上と謂ひ、是れを向下と謂ひ、是れを君とし、是れを臣とし、是れを兼帶の語とし、是れを平實の語とし、自ら人の及ばざる所を見解すと謂ふ。縦ひ一々道理を説き得て、古人と一口に氣を吐くも、是れは是れ生滅の心にして、禪には非ず。殊に知らず、古人の一語一言、<sup>①</sup>線絮團を嚼むが如

①線絮團。わたいとだんこ。

くにして、人をして吞不下、吐不出ならしむ。豈肯へて人の與に幾多の解路を生出し、人の識心を引起せんや。若し疑情發得起し、全身抄入し去らば、此の解路識心は、儼が死し去ることを待たざるに、自然に怙々地ならん。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、身心を將て純ら是れ假縁なりと看破す。其の中に自ら一物ありて往來し、動を能くし靜を能くす、形なく相なし、六根門頭に於て光を放ち地を動す、散するときは則ち沙界に遍周し、收むるときは則ち纖塵を立せず。這裏に向つて、一認に認定して肯へて參究せず、便ち了事の人と謂へり。此れは是れ生滅の心にして禪には非ず。殊に知らず、生死の心破れずして、此等を將つて快意となす、正にこれ識神を弄すること。一朝眼光落地せば、便ち主と作り得ず、識神牽引に隨ひ去り、業に隨ひ報を受け去らん。若し善業多きときは、則ち人間天上に生在す。<sup>②</sup>四相<sup>③</sup>五衰の通り將ち來るに到れば、便ち佛法に靈驗なしと。此の謗法に由

②四相。生、住、異、滅を世法の四相となす。  
③五衰。天人に五衰あり、一衣服垢穢、二頭上花萎、三腋下流汗、四身體臭穢、五本座不樂是也。

つて、地獄、餓鬼道の中に墮在す。出得頭し來らんこと、知んぬ、是れ幾多の劫數ぞ。此れを以て之れを觀れば、參禪は全く人に見ゆることを要す。若し自ら主宰と作らば、總に用不着ならん。工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち箇の眼能く見、耳能く聞き、舌能く譚じ、鼻能く嗅ぎ、手能く執着し、脚能く運奔す、是れ自己一靈の眞性なりと認定す。這裏に向つて度量して、是れを悟門

と謂ふ。人に逢へば則ち眼を瞪り、耳を側て、手を指さし足を踢つて、以て佛法と爲す、此れは是れ生滅の心にして禪には非ず。古人喚んで痲病を發するが如くに、相似たりと作す。又曲蓋牀上に在つて、鬼眼睛を弄するに相似たりと云ふ。弄し來り弄し去つて、四大分散の時に到るときは、則ち弄し去らす。更に一等の惡見あり、此れを以て奇特と爲して遞代相傳へ、人の供養を受けて、慚なく愧なく、人の法を問ふに逢ふときは、則ち大喝一聲し、大笑一場す。殊に知らず、從來未だ曾つて參究せず、命根未だ斷せざることを、縦ひ善事を行するも、都て是れ魔業にして究竟に非ざるをや。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち有爲の功行を做し、或は解脫を做し、或は苦行を行はんと欲す。冬爐せず、夏扇せず、人來つて衣を乞へば、便ち全身脱し去つて、凍死を甘心す、之を解脫と謂ふ。人來つて食を乞へば、便ち自己食はすして、餓死を甘心す、之を解脫と謂ふ。更に種々あり、具に説くべからず。總じて之を論せば、皆是れ勝心の使ふる所にして、無知を誑惑す。彼の無知の者、是れを活佛と謂ひ、是れを菩薩と謂ふて、其の形命を盡して、承事供養す。殊に知らず、佛戒の中に、之を惡律儀の業と謂ふことを。是れ持戒と雖も、歩々罪を結す。又一等あり、身を燒き臂を燃し、佛を禮し懺を求む、之を功課と謂ふ。世法の中に於て

- ① 古人。芙蓉の楷禪師、五燈會元十四卷に出づ。
- ② 曲蓋牀上。椅子のるぬ、禪宗に主に用ひ。
- ③ 鬼眼睛。鬼のやうな瞬をして、にらみする。
- ④ 解脫。諸の煩惱を脱すること。
- ⑤ 菩薩。譯して披苦與樂と云ふ。
- ⑥ 功課。まいにちのきまりのつとめ。

は、亦是れ好事なり、參究分の中には、當に甚麼の事を得べきや。古徳云く、一切に他の機境上に向つて、求むること莫れ」と。謂く、佛を禮するも是れ機境なり、懺を求むるも是れ機境なり、佛法の中の一切の好事、悉く機境なり。是れ憫をして此の一切の善事を行はざらしむるにはあらず、但だ心を一處に用ふれば、此の一切の善事、悉く能く助發し、善根を滋培す。他日道眼忽ち開かば、燒香掃地も皆佛事なる耳。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、便ち散誕し去らんと欲し、便ち活潑し去らんと欲す。人に逢ふときは、則ち自ら歌ひ自ら舞ひ、自ら歡び自ら樂しむ。或は水邊林下に吟咏笑談し、或は市井街坊に横行直撞す、自らはれ個の了事の人と謂へり。善知識の叢林を開き、規矩を立て、或は坐禪し、或は念佛し、或は一切の善事を行することを見れば、則ち掌を撫でて大いに笑ひ、輕慢の心、謗瀆の心を生ず。自ら行道すること能はずして、人の行道を障ふ。自ら誦經禮懺すること能はずして、人の誦經禮懺を障ふ。自ら參禪すること能はずして、人の參禪を障ふ。自ら叢林を開くこと能はずして、人の叢林を開くことを障ふ。自ら說法すること能はずして、人の說法を障ふ。凡そ善知識出世することあれば、幾個の難問を設けて、人天衆前に向つて、多く一句を答へ、多く一句を問ひ、喝一聲し打一掌す。善知識彼が鬼戲を做すに、相似たるを見て、或は理會せざれば、他便ち人に向つ

- ① 滋培。滋養を以て培ふこと。
- ② 散誕。うはのそら。
- ③ 活潑。いきいきしたはたらき。
- ④ 誦。誦の誤り。

て道ふ、某の善知識、這個の道理を會せず、苦なる哉苦なる哉」と。此れは是れ生滅の心、勝つこと久しきときは、則ち魔道に攝入せられて、無窮の深孽を造る。魔福を受くること盡きぬれば、無間獄に墮す。是れ善因なりと雖も、而も惡果を招く、悲しいかな。

工夫を做すに、疑情を發し起さず、衆人に同すれば、動止便ならず、太だ拘束、太だ煩紊なることを覺得して、便ち深山無人の處に向つて、住靜し去らんと欲す。或は一間の房屋裏に向つて、住靜し去る。初めは則ち硬く主宰と作つて、目を閉ぢ心を凝し、跏趺合掌して、硬々に做し去る。或は一年二年、一月兩月にも下落を見ず。又一等あり、坐得するこゝと三兩日、便ち坐不住、或は看書し、或は散誕し、或は偈を做り詩を做り、或は門を關して打睡す、外威儀を現じて、内流俗と成る。更に一等の惡少年あり、廉耻を識らず、因果を信せず、酒かに貪欲を行す。人に逢ふときは、則ち口を恣にし意を肆にして、無知を誑妄す、自ら我れ曾て善知識に見え來り、我れ上人の法を得と言ふて、無知の者をして信受せしめて、彼れと好を通ず。或は結んで道友と爲し、或は招いて徒弟と爲す。上行ひ下效ふて、自ら非を知らず、肯へて返省せず、肯へて人に見えず、妄りに自ら尊大にして大妄語を成す、此の輩を名づけて、可憐憫の者と成す。今

- ① 魔福を受くる。この八字は楞嚴經第八に出づ。
- ② 無間獄。地獄に根本、近邊、孤獨の三種あり。その根本地獄に、八大地獄の別あり、無間獄はその第八位にある也。
- ③ 是善因。此の八字は雲門廣錄中卷四十五葉に出づ。
- ④ 跏趺。詳しくは結跏趺坐と云ふ、右の足を左のものの上に、左の足を右のものの上にのせて坐するの稱。
- ⑤ 合掌。兩手を合はせて信を示すこと。
- ⑥ 威儀。僧侶の正しき風采。
- ⑦ 流俗。俗漢の如きとの義。

時大衆を厭ふて私室を求む、寧んぞ心を寒さざる者ならんや。若し眞正の學道の人ならば、慎んで此の念を萌すこと勿れ、正に好し、衆人の中に向つて、參究して、彼此警覺するに、縦ひ道を悟らすとも、決して這般の田地に陥到せじ、學者警せずんばあるべからず。

疑情發得起に示す警語

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應して、盡大地、光皎皎地に於て、絲毫の障礙なきを見て、便ち個の事に承當すと欲つて、肯て手を撒せずして、法身量邊に坐す。此に由つて命根斷せず、法身の中に於ては、見地あるに似たり、受用あるに似たるも、殊に知らず、是れ子想なることを、古人喚んで隔身の句と作す。既に命根斷せざれば、通身是れ病にして禪には非ず。這裏に到つて只だ須らく全身摺入して、箇の大事に承當して、亦承當の者あることを知らざるべし。古徳云く、懸崖に手を撒して、自ら承當す、絶後に再び甦へらば、君を欺くこと得じ」と。若し命根斷せざれば、全くこれ生滅の心なり。若し命根斷じ去るとも、身を轉じ氣を吐くことを知らざれば、喚んで墮身の死漢と作す、究竟に非ざるをや。這の些子の道理、會し難からず、自らこれ行者、肯て人に見えざればなり。若し善知識に遇着し、痛處に磕着せば、當下に歸を知らん。其れ或は未だ然らざるときは、則ち伏尸萬里ならん。

- ① 法身。無相の眞身にして、所として遍滿せざるなく、時として消ゆることなし。
- ② 承當。うけとる。
- ③ 古徳云。從容錄六十三則に見ゆ。
- ④ 磕着。かつちりといふ、石の聲なり。
- ⑤ 伏尸萬里。說苑奉使篇に出づ、秦王曰く、天子一たび怒れば、伏尸百萬、流血千里。と。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應して世界を攪渾して、波翻り波湧く一段の受用を得て、行人此の受用に耽着して、推して向前せず、約して退後せず、此れに由つて全身投入することを得ず。貧人の座の黄金山に遇着するが如く相似たり、了々明々として、是れ金なることを知り得れども、手に随つて用ふること能はず、古人喚んで、守實の漢と作す。通身是れ病にして、禪に非ず。這裡に到つて只だ須らく危亡を顧みずして、始めて法と相應することを得べし。②天童の法界に普周して、渾べて飯と成す、鼻孔業垂、飽參を信すと謂ふ所なり。若し鼻業垂たることを得ずして、飯籬邊に坐して餓殺し、大海裏に渴殺するが如くならば、甚麼邊の事を濟し得んや。所以に道ふ、悟後只だ須らく人に見ゆべしと、古德悟後、善知識に見ゆるが如き、大いに様子あり。若し自ら個の事に承當して肯へて人に遇ふて、釘を抜き楔を抜かざれば、皆喚んで自欺底の漢と作す耳。

- ①攪渾。かきまはす。
- ②天童。從容錄六十九則に出づ。
- ③飯籬。めしざる。
- ④田塞寒地。せまりふさがる。
- ⑤放下。手を放して下におくこと。

工夫を做すに、疑情發得起して法身の理と相應して、山を看ても是れ山にあらず、水を見ても是れ水にあらず、盡大地 逼塞々地にして、纖毫の空缺の處なければ、忽ち一個の度量の心を生ず。面前を障へ了り、身心を障へ了るに似たり。提すれども亦不起、撲すれども亦不破、提起すれば有に似たり、放下すれば無に似たり。口を開き氣を吐くことを得ず、身を移し歩を換ふることを得ず、正恁

麼の時も亦這裏に到るも、通身是れ病にして禪には非ず。殊に知らず、古人用心純一にして、疑情發得起すれば、山を看ても是れ山にあらず、水を見ても是れ水にあらず、度量の心を生せず、別念を起さず、硬々に逼拶し去る。忽朝に疑團を打破すれば、通身是れ眼にして、山を看れば舊きに依つて山、水を見れば舊きに依つて水、山河大地、甚麼の處に從つて得來るや、纖毫の悟迹を求むるに、了に不可得なり。恁麼の田地に到つても、只だ須く人に見ゆべし。若し人に見えずんば、枯木巖前岐路の中に、更に岐路あり。此に到つて蹉跎せず、枯木椿に絆倒せられずんば、博山他と個の同參を結ばん。工夫を做すに、疑情發得起して法身の理と相應して、便ち沈々寂々にし去り、休し去り歇し去り、一念萬年にし去る。疑情を將つて法身の理中に鈍置し、受用することを得ず。一向に死し去つて、回互なく、管帶なく、氣息没うして、全く死水裏に浸殺せられて、自ら之を極則と謂ふ、通身是れ病にして禪には非ず。③石霜の會下、此くの如く工を用ふる者極めて多し。縦ひ坐脱立亡するも、受用を得ず。若し鉗錘を受け得て、痛痒を知り得、身を轉じ得、氣を吐き得ば、便ち是の人ならん。若し痛痒を知らずんば、法身の句を會得し、只饒十方を坐斷すと雖も、甚の用處あらんや。天童の十方を坐斷するも、猶ほ點額、密に一步を移さば、飛龍を看んと謂ふ所な

- ③岐路。列子の説符篇にあり。
- ④蹉跎。くちがふ。
- ⑤枯木椿。椿はくひ也。疎山和尚、法身を以て枯椿となすと從容錄に見ゆ。
- ⑥石霜會下。從容錄九十六則を參照すべし。
- ⑦點額。落第するを云ふ、魚の三級の淵をのぼりえずしてなどりかかり、つひに頭をうちてあぶあぶと眼を白黒させるをいふ。



り。古人大いに警語して爲人の處あり、大に葛藤して相委悉することあり。自らは人肯て打徹せず。善知識の、人叢り馬踏むの中に、千自由百自在なることを學ばんと欲すとも難からざることを得んや。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應して、坐して湛不搖の處に到りて、①淨裸々②赤灑々③沒可把なれば、便ち放身し去つて、位を轉じ機に就くことを識得せず。這裏に向つて強ひて主宰を立て、法身邊に滞在す、通身是れ病にして禪には非ず。洞山云く、「峯巒挺異なれども鶴、機を停めず、靈木迢然たれども鳳、依倚することなし」と。當に知るべし、峯巒靈木の四個の字、太煞玄奥、是れ乾爆々地にあらず。不停無依の四箇の字、太煞活潑、是れ死猶狙地にあらざることを。若し究めて玄奥の處に到らば、則ち入理の深きことを知らず。若し活潑の處に到らざるときは、則ち旋機の妙を識らず。道人の用心は用て、用ふべきこと無き處に到りて、正に好し人に見えて、漆桶を打翻して箇の徹處を得るに、豈に愚を抱き株を守つて、一隅に滞在して、籠中の鶴、退毛の鳳と做ることを甘心すべけんや。

- ①淨裸々。きよくまつげだか。
- ②赤灑々。きれいさつぱり。
- ③沒可把。沒巴鼻に同じ、捕促するところのなきなり。
- ④挺異。ゆきんでて大なること。
- ⑤迢然。はるかにたかきこと。
- ⑥太煞。甚の字と同義也。
- ⑦乾爆爆地。かわいてばちばち、無意味のこと。
- ⑧死猶狙地。(前に脚注す)
- ⑨漆桶。煩惱を入れたる桶にて、凡夫の情識に譬ふ。
- ⑩隱隱地。微かにして、分明らかぬ。

工夫を做すに、疑情發得起して法身の理と相應すれば、面前、①隱々地に個の物あるに似て相似た

り。此の隱々地を將つて、疑ひ來り疑ひ去つて、個の前景に②格定して、便ち自ら法身の理に入得し、法身の性を見得すと謂へり。知らず此等目を捏つて成する所なることを。通身これ病にして禪には非ず。若し眞個入理の人は、世界闊きこと一丈なれば、古鏡闊きことも一丈、身を横へて宇宙に當つて、其の根塵器界を求むるに、了に不可得なり。又何を將つて身と爲し、何を將つて境と爲し、何を將つて物と爲し、何を將つて隱々地とか爲ん。雲門も亦此の病を指出す、尙ほ多文あり。若し此の一種の病を明め得ば、則ち下の三種の病は、③渙然として氷の如くに釋けん。博山嘗て學者に謂ふて曰く、「法身の中に病最も多し、只だ須らく大病一場して始めて病根を識得すべし。假使盡大地の人、參禪すとも、未だ一個も法身の病を受けざる者あらず、惟だ盲聾瘡啞の者を除く、此の限に在らず。」工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應すれば、④古人盡大地是れ沙門の⑤一隻眼、盡大地、自己の一點の靈光、盡大地是れ自己の一點の靈光の裏に在り、と道ふを見、又⑥教中に一塵の中に無邊の法界の眞理を含む、と道ふを引いて、便ち這裏に向つて⑦領略し去つて、肯へて進益を求めず、生することを得ず、死することを得ず、此の解路を將つて之を悟門と謂ふは、通身是れ病にして、禪には非ず。殊に知らず、縦ひ理と相應するも、若し打不脫なれば、全く是れ理障にして、法身邊に墮在す。何ぞ

- ①格定。橋はくひなり。格定は縮びつく也。
- ②隱々。とけちること。
- ③古人。長沙を指して云ふ、從容錄七十九則に出づ。
- ④沙門。僧侶を沙門といふ。
- ⑤一隻眼。心眼を指す。
- ⑥教中に。從容錄八十四則。
- ⑦領略。合點すること。

況んや解心に牽引せられて、入理の深きことを能くせざるをや。這個の彌猴子、捏するとも死せず、既に死し去らざれば、又安んぞ絶後に再び甦ることを得んや。當に知るべし、最初に疑情を發せば、便ち理と相應せんことを要せよ。既に理と相應せば、個の深入を得んことを要せよ。既に個の深入を得ば、須らく萬仞巖頭に向つて、<sup>①</sup>勛斗を翻すべし。打し將ち下り來つて、手を擺つて、<sup>②</sup>漳江を出でば、始めて是れ。大人の用心ならん。然らずんば盡く掠虛の漢にして、當家の<sup>③</sup>種草には非ず。

工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應すれば、行住坐臥、日色裏に在るが如く、<sup>④</sup>燈影裏に在るが如くにして、<sup>⑤</sup>淡々地にして、<sup>⑥</sup>沒滋味なり。或は更に全身放下し、坐して水澄み珠瑩くの際、風清く月白きの時に到る。<sup>⑦</sup>正恁麼の時に、依正報中都べて一片の境と成り去り、清々淨々、伶々俐々たり。自ら之を究竟と謂ふて、身を轉じ氣を吐くことを得ず。<sup>⑧</sup>廊に入り手を垂るゝことを得ず。又肯へて人の決擇を求めず。或は淨白界中に向つて、別に異念を生出して、之を悟門と謂ふ。通身是れ病にして禪には非ず。<sup>⑨</sup>天童の清光眼を照すも、家に迷ふに似たり、明白身を轉ずるも、猶、位に墮す、と謂ふ所なり。良に以れば、清光眼を照せば、豈、水澄珠瑩、風清月白にあらざらんや。明白身を轉すれば、更に

①勛斗。(前に脚注す)。  
②漳江。虛堂集五十九則に出づ。  
③人。悟道の達人といふ事。  
④草。禪家の佛種の義。  
⑤燈影裏。從容錄十一則參照。  
⑥淡々地。あつさりした。  
⑦沒滋味。うまみなし。  
⑧正恁麼。まさにかういふと。  
⑨依正報中。正は報、中は主。  
⑩入。魔垂手。修行の第一歩。  
⑪天童。從容錄の二十六則。  
⑫風處。わけておく。  
⑬拈一草。從容錄の四十七則。

一步を進め得たるなり。只だ迷に似たり位に墮するの四箇の字を消して、一印に印定す。行人此に到つて、又作麼生か。區處せん。只だ須く大いに轉變すること有るべし。<sup>①</sup>一莖艸を拈じて丈六の金身と作して、用ふことも未だ分外と爲す。然らずんば是れ椿に釘つて櫓を揺し、<sup>②</sup>漁父巢に棲む、喚んで没血氣の漢と作す。千個萬個を打死すとも、甚麼の罪過あらんや。工夫を做すに疑情發得起して、法身の理と相應すれば、法身邊に於て奇特の想を生じ、光を見、華を見、種々の異相を見て、便ち<sup>③</sup>聖解を作す。此の殊異の事を將つて人を街感して、自ら大悟門を得と謂ふ。殊に知らず、通身是れ病にして禪に非ざることを。當に知るべし、此れ等の殊異の境像は、或は是れ自己安心、凝結して成じ、或は是れ魔境隙に乗じて入り、或は是れ帝釋天人變化して試に現することを。安心凝結とは、淨土を脩する人、觀相して念を移さざれば、忽ち佛の像、菩薩の像等を見るが如きは、<sup>④</sup>十六觀經の中に説くが如し。悉く淨土の理と合すれども、參禪の要門には非ず。隙に乗じて入るとは、楞嚴經の中の<sup>⑤</sup>五蘊空する時に、行人心に所着あれば、魔即ち意に隨つて現するが如し。變化して試に現すとは、菩薩修行の時に、帝釋身を化して無頭の鬼、無五臟の鬼を現す、菩薩怖畏の心なければ、復た美女の身を現す。菩薩愛染の心なければ、復た帝釋の身を現して禮拜して云く、<sup>⑥</sup>太山をば崩すべく、海水をば竭すべきも、彼の上人は、其の心を動し難し

①漁父云云。從容錄第六十八則に出づ。  
②聖解。上卷にある勝解と同じ。  
③帝釋。詳しくは、釋迦提桓因陀羅といひ、初利天の主なり。  
④五蘊。色、受、想、行、識。  
⑤太山。支那の名山、泰山ともいふ。

といふが如し。故に云く、野人の伎倆は盡くることあり、老僧が不見不聞は窮りなし」と。若し眞の參學の人は、縦ひ白刃前に交加すとも、念を動ずるに暇なけん。何ぞ況んや、靜定の中の不實の境相をや。既に理と相應するときは則ち心外に境なし、能觀の心、所現の境、又甚麼の處に安在せん。工夫を做すに、疑情發得起して、法身の理と相應すれば、身心輕安にして、動轉施爲、相留礙せざることを覺得す。此れは是れ正偏道交し、四大調適にして、警爾として是くの如し、究竟に非ざるをや。彼の無知の者、便ち疑情を放下して、肯へて參究せず、自ら大悟門を得と謂ふ。殊に知らず、命根斷せざれば、縦ひ能く理に入るも、全くこれ識心、識心を以て卜度し、通身是れ病にして禪に非ざることを。入理深からず、轉身太だ早きが爲に、深知ありと雖も實用を得ず。縦ひ活句を得とも、正に好し水邊林下に向つて、保養含蓄するに、切に躁進して便ち人の爲にせんと欲し、妄りに自ら尊大なるべからず。當に知るべし、最初の用心疑情發得起して、一團に結する時に、只だ渠が自己迷開するを待つて、始めて受用を得ることを。然らずして稍理致あれば、便ち疑情を放下せば、這裏定んで是れ死不去、定んで是れ打不徹、一生虚しく過して參禪の名ありて參禪の實なけん。只饒、廊に入

- ① 野人云云。五燈會元の二に出づ。壽州の道樹禪師乃ち壽州の三峯山に留り居るときの事迹なり。
- ② 安在。おくといふの意。
- ③ 四大。地、水、火、風。
- ④ 警爾。はつきりとした事。
- ⑤ 識言。業識と色心。
- ⑥ 轉身。凡身を轉じて成佛すること。
- ⑦ 保養含蓄。保養は悟道了りて悟後の修養。含蓄はふくみもつて、表にあらはれぬ意味を有す。
- ⑧ 躁進。あしげやにすすむ。
- ⑨ 迷開。ほとぼしり、ひらく。

り手を垂るとも、妨げず、更に大善知識に見ゆることを。彼の善知識は是れ大醫王、能く重病を療す。是れ大施主能く如意を施す、切に自足の想を生じ、人に見ゆることを欲せざるべからず。當に知るべし、肯て人に見えざるとは、己見を執するが爲にして、禪中の大病、此れに過ぐるものなきことを。

禪人公案に參するに示す警語。

董巖の達空 禪者に示す

虚空に通達して、白浪を翻するも、好し家私を把つて都べて破蕩するに、眼ありて見えす、耳ありて聞するも、赤肉團中、痛棒を加へん。從教れ白醜口邊に生ずることを。佛法塵勞一へに坦平正念にして針鋒も箭不入、面皮鐵を鑄て人情を没す、禮に非ずんば軽く動歩せしむること莫れ。舉止安庠として、回互することを要す。謾に知見を將つて、妄に疎親せんより疑團を撻碎して、須らく妙悟すべし。疑團を破せざれば、誓つて休せざれば、放出瀉山の水牯牛、一朝暮鼻に穿つて歸れ、逆地天を遮る這の頭。

峯頂の智達禪者無字の公案に參するに示す

國譯博山和尚參禪警語 卷之下

- ① 意。大慈悲の方便。
- ② 禪者。晩年の僧の稱號。
- ③ 家私。自己本分。
- ④ 破蕩。やぶりとらさす。
- ⑤ 赤肉團。五尺のからだ。
- ⑥ 白醜。白きかび、又はきび。
- ⑦ 塵勞。煩惱、妄想の事。
- ⑧ 坦平。しやうぢきといふ事。
- ⑨ 割不入。議論の餘地のないところはずておくこと。割はかぎ、針の先で、挿込むほどのすさまじいところは、かまはずにほつておく、といふこと。
- ⑩ 舉止。進退。
- ⑪ 安庠。やすくなりどころ。
- ⑫ 回互。いりくみ。
- ⑬ 疎親。所參の語頭に疎親すること、一定せざるをいふ。
- ⑭ 撻碎。うちくだく。
- ⑮ 放出。ゆるす。
- ⑯ 瀉山の水牯牛。瀉山の公案。瀉山は雲祐と號し、百丈に嗣ぐ。

狗子佛性無、當下に親疎を絶す。千尋の浪に入つて、惟だ赤尾の魚を求むるが如し、角あるも鯉に關るに非ず、鬚なきも是れ渠にあらず、有無俱に勦絶して、直に驪龍の珠を探らん。又四面の火の如し、前方一線餘る、退歩すれば即ち燒殺す、横趨すれば亦軀を喪す、烈燄停止するに非ず、生を求めて徐なることを待つこと莫れ。九重の淵に入るが如く、萬仞の虛に憑るが如く、用意切なること此くの如くならば、靈樞を發することを管取せん。更に前程の路あるも、水到れば自ら渠と成らん。

智白禪者 乾屎橛の公案に參するに示す

如何なるか是れ佛。乾屎橛。大千世界一團の鐵、渾身鐵團の中に坐す。出ることを得ざる時、誰に向つて説かんや。白、禮拜す。復云く、禮拜すること莫れ、只饒、出得する時も、三十棒を領收せん。

智燄禪者 一句の語頭甚の處に在つて起るといふに參するに示す

一句の語頭、甚の處より起るや、滄海只だ乾いて底に到らしむ。一句の語頭、甚の處に去るや。春風觸着す珊瑚の樹、去ることを究めず、只だ起ることを究めて石陥り崖崩るとも、兩耳を聳せよ。十二時中、歩移さず、

- ① 唐、代宗の太曆六年に生る、日本、光仁天皇實德二年に當る。
- ② 驪龍。まつしぐらに。
- ③ 迥地。迥迥地など云ふて、はるかにとほきこと。
- ④ 親疎。是非をなくする。
- ⑤ 勦絶。のこらずたえる。
- ⑥ 驪龍。純黑色のたまをうばふ龍。
- ⑦ 靈樞。大事のくるろ、極意のこと。
- ⑧ 乾屎橛。糞拭きべら、糞を拭ふ木片、概はきざれ也。
- ⑨ 渾身。身體一ばい。
- ⑩ 歩武。わづかのへだたりなり。歩は六尺、又は六尺四寸、武は半歩。
- ⑪ 臺山。臺山路上に婆子あり、趙州和尚、是の婆子を勦するの公案。
- ⑫ 鐵直。まつまぐに行け。
- ⑬ 居士。在家の信者にて禪を參するものを云ふ。
- ⑭ 脊梁。(前に脚注す看よ)。

及鋒に在つて住止を求むるが如くせよ。只だ須らく勦斗を打し將ら來るべし。靜陸平原方に歩武、男兒志を立つること若し斯くの如くならば、誰か道はん、龍を搏にし、併に虎を拵つと。臺山の路、若何んと問ふことあらば、遙かに前村を指して、驀直に去らしめん。

心陽 居士沒踪跡の公案に參するに示す

沒踪跡、身を藏すこと莫れ。脊梁を堅起して、祇麼に行け。鐵壁銀山俱に靠倒す、幾回か歡喜し幾回か噴る。身を藏す處、沒踪跡、虚空に向つて、鳥跡を尋ぬることを休めよ。娘生の鐵面皮を放下して、蒺藜黄金の汁を傾け出す。返復して看よ、多からしめざれ、甚んの衆生と佛魔とを管せんや、只だ一口に都べて吞盡せしめ、滴水も翻つて幾丈の波と成る、行も也た參じ、坐も也た究めよ。指頭を踢破せば、俱に漏逗、倒に鉄馬に騎つて、須彌に上る、一生人の後に隨ふことを得ず。

照 監院萬法歸一の公案を看るに示す

萬法一に歸す、一何れの處に歸するや。眉毛を堅起すれば、大火聚の如し。生は與に同生し、死は與に同死す、行は與に同行し、住は與に同住す。頓に疑情を起して、怕怖を生ずること莫れ。大敵に臨むが如く、他を顧みるに暇あらず。逆順の境に逢ふて、須らく善く回互すべし。歸處知らず、肯

へて他務に隨はんや。鐵圍山を撞破し、寶藏庫に踞踏せば、瞬目と楊眉と全機素布に彰はる、<sup>①</sup>青州の布衫、重きこと七斤、門前舊きに依りて桃千樹。

普周禪者念佛の公案に參するに示す

一句の阿彌陀、珠の濁水に投するが如く、珠を投すれば、水自ら清む、佛を念すれば安即ち止む。水自ら清くして、鬚髮鑑みつべくして、纖塵を絶す。<sup>②</sup> 依稀として識得す、娘生の面、<sup>③</sup>展似す眉毛作麼生、安即ち止む。萬里澄潭底を見ず、碧玻璃の上、珊瑚の枝、雪のごとくに老い、水のごとくに枯る。祇だ這は是れ念即ち空、三更初夜日通紅、寶池金地蓮花國、萬派全く歸す指顧の中。指顧の中、此の念を空す、念空空念一片と成る、十萬の程途、當下に知る。根塵陰界、<sup>④</sup>摩尼の殿。摩尼の殿、光皎々、佛法塵緣都て照了す。位を轉じ機を旋す、事若何。噫、生とも也た道はず、死とも也た道はず。

觀如禪者父母未生の公案を看るに示す

父母未生前、誰かこれ本來の面、<sup>⑤</sup>鏡心肝を放下し、吹毛の劍を<sup>⑥</sup>提起す。世法及び塵緣、<sup>⑦</sup>蟻の猛儀に入るが如く、無量の妙法門、參禪最も靈驗あり。句話頭を<sup>⑧</sup>單提して、諸の方便に墮せざれ。萬別と千差と<sup>⑨</sup>都來一念に融せよ。萬仞の巖前、湛水<sup>⑩</sup>。淳々、一帶の晴空、閑雲片々、此に到るときは

- ① 青州の布衫、青州の公案。
- ② 依稀、さしにたり、と譯す。
- ③ 展似、のべしめすこと。
- ④ 摩尼、珠の名、此には如意と譯す。
- ⑤ 提起、ひつぎてたつこと。
- ⑥ 蟻、蜂の一類也。
- ⑦ 單提、唯一つを提げること。
- ⑧ 懸來、すべて。
- ⑨ 淨淨、水の澄浄せる形。

則ち心月孤圓、敢へて曰はん、靈明顯現すと。光萬境を吞んで境光に非ず。却りて笑ふ澄江淨うして練の如くなることを、<sup>①</sup>練の如くなるに非ず、祇だ一線更に火に入りて重ねて烹煉すべし。穴細の金針、鼻を露はす時、蘇州の布、也た楊州の絹、<sup>②</sup>參。

宗妙禪者千日の期を以て公案に參するに示す

善く道に造る者は、千日の功、趣向、栗棘蓬を吞むが如くにす。淨白界中、<sup>③</sup>纔かに一念あれば、須彌山隔てて其の中に在り、一句の語頭、<sup>④</sup>鏡樾の如し。佛法塵勞都て屏絶す。<sup>⑤</sup>昏沈散亂團と成し去つて、只だ須らく切上に重ねて切を加ふべし。千日頃刻の間に如同して、意路心思往還を絶す。兩足を放開して、超然として上れば、烈火厨水總に是れ閑、全身無生國に擲入して、妙に有無の軌則を出づ。虚空に逼塞して、人を顧みず。始めて知る、大地漆の黒きが如くなることを。翻身の拄杖、活すること龍の如し、海を透り山を穿つて古風を振ふ。此れは是れ<sup>⑥</sup>日旋三昧の力、法界毫端用窮らす。更に向上末後の句あり。玄妙機微都て不是、如來の行處に向つて行せず、男兒自ら天に冲するの志あり。

- ① 練、れりぎぬ。
- ② 參、禪客を招ぐ語なり、まいれ、きたれとの意なり。
- ③ 鏡樾、鏡のくさびなり、離れ難きに譬ふ。
- ④ 昏沈、ぐちになりて。
- ⑤ 日旋三昧、法華の妙音品に出づ、日輪三昧ともいふ。

六雪關主公案に參する行人話頭真切ならば、楞嚴の五蘊の魔外に落ちざるやと問ふに答ふ

楞嚴の五十種の魔事を細觀するに、一個の着の字を出でず。色陰明白にして、諸念を鎮落す、乃至

是の人、則ち能く劫濁を超越す、其の所由を觀するに、堅固妄想以て其の本とすといふが如き、即ち此の堅固妄想、便ち融化する事能はず。妄想の中に於て、精研して希奇の事を見て聖解を作す、豈に着に非ざらんや。聖解を作さざれば、善境界と名づくといふが如き、作さざるは即ち着せざる耳。又五蘊の中、總べて妄想の二字を以て之を結す。最初の一着、便ち破ること能はざれば、即ち此の妄想、便ち是れ魔の根蒂なり。其の根本除かずして、其の枝葉を挫いで、其をして生ぜざらしめば、可ならんか。甚しきときは乃ち其の虚明を利とすれば、彼の精氣を食ふ、悉く妄想牽合す。魔外より來るに非ず、苟も慎護に涉らば、正に雪上に霜を加へ、火上に油を益すと謂ふ所なる耳。受陰の中の虚明妄想の如き、虚明も亦妄想なり。蓋し最初に未だ求心不有の地に到らず、妄に非ずして何んぞや。① 想陰の中の融通妄想の如き、最初の章に心に圓明を愛すと云ふ。即ち前の妄根境と融通して便ち愛着を生ず、十種悉く心愛等と云ふ。蓋し天魔圓境の中より來りて、愛心と偶合して、無邊の魔業を作す、安んぞ救ふべけんや。良に以んみれば、行人最先に此の一念を坐斷して無心ならば、即ち愛なけん。愛なきときは即ち着の一字何んぞあらんや。只だ第九の章に、心に入滅を愛し、澁空を貪求す等と云ふが如き、悉く是れ魔業、亦最初の妄心に破せざればなり。② 沙を蒸して飯と作す、沙は飯の本に非

- ① 劫濁。俗世の濁りをいふ。
- ② 希奇。めづらしき。
- ③ 虚明。わだかまりなき心。
- ④ 精氣。肉體に執着する習氣。
- ⑤ 受陰。六陰の内の一つなり。
- ⑥ 想陰。同上。
- ⑦ 偶合。丁度相合ふこと。
- ⑧ 蒸沙云云。楞嚴第六卷に出づるの意。
- ⑨ 行陰。六陰の内の一つなり。

すと謂ふ所なるや。⑩ 行陰の中の幽隱妄想の如き、蓋し行陰は乃ち遷流して止まらざるを性と爲す、故に生滅の根元、此れより披露すと云ふ。想陰盡くるが爲に、行陰の中の根元、悉く是れ生滅念々停らざることを徹見して、行人生滅に隨つて遷流せず、故に凝明の正心を得。爾の時天魔、其の便を得ず、但だ圓元の中に於て、計度を起す、故に其の始末、有因無因等を窮む。既に計度あれば、正偏知を亡す。計の一字、幽隱の中より來る。文に云く、「彼の幽清を觀るとは、源底を徹見すること能はざるなり、識陰の中の顛倒妄想の如き、謂く、同分の生機、倏然として驟烈す。六根虚靜にして復た馳逸すること無し」と。虚靜を不馳逸と爲す、不馳逸を行陰盡くとする耳。行陰既に盡くれば、見聞鄰を通じて、互用清淨なり。故に云ふ諸行の空を窮めて、識の元に依る。乃至精妙未だ圓ならざるに、便ち勝解を生ず、此の十種悉く識心を以て勝解を生ず、既に勝解を作せば、圓通に達遠して、諸の種類に生ず。禪門の中、善く用心する者は俱に相渉らず。⑪ 思大云く、「十方の諸佛、我れに一口に吞盡せらる、何れの處にか更に衆生の度すべきあらん」と。此れは是れ佛祖位中、渠を留むれども住らず、邪魔外種其れ爾を奈何んせん。其の能を受けざることを得んと欲せば、但だ全身入理せよ。遣ることを待たず、護ること

- ⑩ 有因無因。因縁の有無の略。
- ⑪ 正偏知。阿耨多羅等正覺の因を無上の正偏知といふ。
- ⑫ 識陰。(二六頁の脚注を看よ)
- ⑬ 倏然。たちまちと譯す。
- ⑭ 驟烈。そこなふこと。
- ⑮ 馳逸。はしりにぐるること。
- ⑯ 互用。たがひに主となり、件となること。
- ⑰ 精妙。こく。
- ⑱ 勝解。聖解とも記す(注前出)
- ⑲ 思大云。梁時代の名僧、南嶽思大和尚なり。この語は講錄第十則に見ゆ。
- ⑳ 外種。外道の輩。

を待たずとも、妄想念盡くるときは、則ち魔業自ら盡きん。古徳云く、「便ち好し、根に和して一斧を下さば、節外又枝を生せしむることを免れん」と。

脩證を執せず 脩證を廢せずといふの間に答ふ

吾が宗門下には、利鈍賢愚を論することなし、但だ信を以て入る。既に猛利の心を發起して、鐵壁銀山に坐在して祇だ 進出を求むるが如くならば、諸の妄想の心悉く入ること能はじ、觀照功行安きこと將た寄らんや。果して一念 迷用することを得ば、雲を披いて天を見るが如く、故物を獲るが如くならん。觀照功行亦何んぞ施す所あらん、祇だ參究の念、甚だ切なることを貴ぶ。其の參究亦功行に涉る、但だ功行を以て名を立てず。圓覺に云ふが如き、「惟だ頓覺の人と并に法不隨順とを除く」と。若し觀照を以て事と爲るときは、則ち能觀能照の心あり、必ず所觀所照の境あり、能所對立す、妄に非ずして何んぞや。所以に禪宗に云く、「大方に獨踏すれば、心外に境なし」と。十方世界泊び父母の身心を將つて、融して一箇と成し、兩頭を坐斷せば、始めて個の入門を得ん。向上の一路は更に須らく自ら看るべし、然らすんば盡く是れ 鬼家の活計、安んぞ脩證を以て日を同じうして語るべけんや。果して 顛頂として此の地に到らざるをば、即ち自欺と名づけ、此の輩を名づけて、可憐愍の者となす、寧んぞ 齒録するに堪へんや。南嶽云く、「脩證は即ち無きにあらず、汗染すること即ち得す」と。即ち此の不汗染の脩、圓脩と謂ふべし。還つて箇の證の字を着得せんや。此くの如くなるときは則ち終日脩して脩なく、掃地焚香悉く無量の佛事なり、又安んぞ廢すべけん、但だ脩證に着せざる耳。九地すら向は無功行なり、況んや十地をや。乃至等覺、說法雨の如く、雲の如くなるも、猶ほ 南泉に道と全く乖くと呵斥せらる。況んや十地觀照をや、宗門と而も其の優劣を較べば可ならんや。

①古徳云。從容錄五十三則に見ゆ。茲には大聖安の華和尚の竹筭の詩を引用せり。  
②脩證。脩は修行と、修證といふこと、證は同上の結果として得たる大悟と證得といふこと。  
③進出。ほとばしり出づること。  
④迷用。盛に用ゐること。  
⑤圓覺經。辨音菩薩章に見ゆ。  
⑥鬼家活計。死人の用所にて、無駄なこと。  
⑦顛頂。あざむくと譯す。

參禪を示す 偈十首

參禪は須らく鐵漢なるべし。期と限とを論すること毋れ、牙齒關を咬定して、只だ大事を辨せしめよ。猛火油鑪を熱して、虚空都べて煮爛す。忽朝撲轉過せば、千斤の擔を放下せん。  
參禪は久しきを論すること莫れ、塵縁と偶せざれ。兩莖の眉を 剔起せば、虚空も顛倒して走らん。須彌碾つて末と成り、當下に本有を追ふ。生鏡金汁流るれば、始めて従前の咎を免れん。

①齒録。齒は録の如し、言ふ心は、齒に挂くるに足らざるを云ふ。  
②南嶽。懷讓禪師、六祖に參するの問答中に見ゆ。  
③南泉。南泉普願禪師は、斬猫して衆徒を呵斥す。上の文にある、等覺の菩薩說法云々の語あればなり。  
④偈。印度には伽陀と云ふ、この偈韻字は各各別なり、今國譯にして讀み易きを主とす。  
⑤牙齒關を咬定して。ざぜんをするに牙齒を咬定し、口の關所をしまる。  
⑥剔起。のぞききる。  
⑦拏盧。しみたれ。  
⑧行誼。行狀禮義のこと。

參禪は 莽鹵なること莫れ、行誼古を稽へんことを要す。一條弦直の心、岐路に遭ふて苦ます。黃龍の關を撈碎し、雲門の普を拈却す。這箇 破落の僧、從來戸を出でず。

參禪は主宰を没せよ、祇だ心を改めざらんことを要す。萬彙及び塵勞旋空、誰か 倣保せん。堅硬にして天を撃ぐべし、勇決にして海を擘むに堪へたり。然も未だ徹頭せずと雖も、前程を管取すること在らん。

參禪は須らく審細なるべし、工程を把つて計ること莫れ。條あれば便ち條を扳ぶ、條なければ即ち例を扳ぶ。佛と祖とを親しうせず、甚の經と偈とを管せん。都來一口に吞まば、心空始めて及第せん。

參禪は正信を發せよ、信正しければ、魔宮震ふ。片雪紅爐に入り、赤身白刃に遊ぶ。只だ活路を尋ねて上れ、死水をして浸さしむること莫れ。大散關 忽ち開けば、倒に 毘盧の印に跨らん。

參禪は把玩することを休めよ、倏忽として時光換る。至理及び玄奧、秦の時の鍔鏃鑽、咄哉丈夫心 手を着けて還つて自ら判せよ。百年能く幾何ぞ、行くに臨んで亂ることを待つこと莫れ。

① 黃龍の關。黃龍三關の公案。  
② 雲門の普。僧問ふ、如何是止法眼と、雲門曰く、普と。

③ 破落。會元第二十卷彦充章に、破落戸とあり、ごろつきと譯し、無頼漢也。  
④ 萬彙。もろもろの所作。  
⑤ 旋空。めぐりちる、あつまる。

⑥ 倣保。看顧みるなり。  
⑦ 條あれば。この語は一定の規定があるならば、その規定通りにするがよし、一定の規定がなくば、慣例に従へとの意。

⑧ 心空及第。龍居士の偈に「十方同聚會、箇箇學無爲、此是選佛場、心空及第歸」とあり。大悟徹底して了るを云ふ。  
⑨ 魔宮震。魔どもおそれる。  
⑩ 赤身。赤裸々に同じ。

⑪ 大散關。大明の一統志に、大散關は寶雞縣の南五十二里に在りと。  
⑫ 毘盧。佛を云ふ。  
⑬ 咄哉。やれやれ。

參禪は 巧拙なし、一念超越することを貴ぶ。指上の影を識得して、直に天邊の月を探れ、胸を 劈開して心を見る。毛を刮り去れば血あり、分明に君に 舉似す、會せずんば誰に向つて説かん。

參禪は須らく趣ふこと早かるべし、年紀の老ゆるを待つこと莫れ。耳聾し眼朦朧、朝在つて、夕保ち難し。生平最樂の事、此に到りて都べて 潦倒。佛法本多なし、祇だ今時に了せんことを要す。

參禪は妄を治むること莫れ、妄を治すれば、仍た障と成る。譬へば 華鯨を得んと欲せば、甚の波濤の漾ふことを管せん。至體纖塵を絶す、妄心是れ何の状ぞ。謹んで參禪の者に白す、斯の門眞に向ふべし。

① 手を着けて。手を心頭に着けて便ち判ぜよ。  
② 巧拙。上手、下手。  
③ 劈開。さきひらくこと。  
④ 舉似。問を設けて、衆に説き示すこと。  
⑤ 會。さとる。  
⑥ 潦倒。二義あり、癡癡の貌、一は老羸の貌、またよたの貌。  
⑦ 華鯨。單に鯨といふを形容して、華鯨といふなり、別意なし。  
⑧ 至體。至道至大の體といふ略。  
⑨ 斯の門。この吾が禪門といふ略。

國譯博山和尚參禪警語卷之下 終



## 博山和尚參禪警語序

警乃醒覺之義，或云驚也。譬有賊瞰巨室，主人張燈夜坐，堂皇之上，警效作聲，賊思不能便，稍爾昏睡，則乘間而入，豪爲之傾，故嚴城擊柝，刁斗鳴，卒有變而無虞，以其警備於機先也。人有生死大患，適萬劫不醒之長夢，況六爲賊媒，日劫家寶，不有大覺之雄，痛語警醒，則終身醉夢了無悟日，非但睡時做不得主，卽白晝開眼，魔語尤甚。故博山大師乘悲願力來作大醫王，用一味伽陀遍療狂狷業病，故有示禪病警語五章，直捷簡當，把參禪骨髓中病，都說透過，其開示做工夫語，最爲喫緊，真是禪門一種切要新書，亦拯世之金丹九轉也。夫禪也，假名無體，何有病乎？蓋參禪人多起執情，謬解被心意識，哄殺不向機境上求，便向學解中討，或被古人言句礙膺，或向死水裏浸殺，或坐在無事甲裏，不是靈利心死不得，便是癡著心轉不得，故命根難斷，生滅宛然，通身都是我病，非是禪有病也。甚則成狂著魔，佛亦不可拯，此名業病，亦非禪病也。假饒死得種種心，不肯做工夫，與法身理相應，不曾踏著向上關，揀坐在飯籬裏，輕安自在，只箇輕安正是禪病，故僧問古德，如何是清淨法身德，云：無量大病源。此語如栗棘蓬，吞吐誠難，古人從真參實悟中，病過一番來，其垂手處，自不亂下鍼錐，要箇絕氣息，識痛痒底漢，方肯診視，是以識病乃能去病，調已然後調人，可謂三折肱爲良醫歟。博山大師自來參究此道，極是融通，凡有言句，皆中肯綮，非故爲高妙玄著之談，使人不知，乃平日親證實履境界，見

到說到行到用到，其義理精明辨才無礙，所以快說禪病，如握秦宮玉鏡，照見羣僚肝膽，一毫隱諱不得。古今踞曲盡牀，稱善知識說禪者，如師之妙罕儼然，禪病最難說，說亦不能盡何哉。病卽法身之病，法身無數病，寧有極善救法身病者，以病爲妙劑，以病爲家常茶飯，以病爲貼肉汗衫，在善葆之而已。古人於病假中游戲，而爲佛事，蓋看破法身無主，病自霍然，故洞山道老僧看時不見有病，特由妄想執着，故禪病競生。昔佛說楞嚴五蘊魔事及外道徧計，卽是今人禪病中事，然着卽成魔，計則名外，不着不計，亦未爲病，所以云不作勝心，名善境界。若作聖解卽受羣邪，法華云有一導師，善知通塞險難道路，故能導彼衆人，前至寶所，然則大師此書正末世舟杭初心徑路，豈但有益於今日，亦有補於將來，決欲參禪做工夫，求大悟門，肯細觀此書，大有相爲作略，能使疑情發不起處發起，病根點不破處點破，如披沙露寶，要渠自取，如開霧見天，使人不迷，截路中有出身之路，死句裏有活人之句，如圓珠走盤，不滯一語，其妙用如此，人人知此用心，可以坐睡見道，不費許多艸鞋錢，直到大安樂田地，與佛祖同一鼻孔通風，有能以此自警者，警衆復以此自愈者而愈人，亦名現在醫王，使祖師命脈流通，國脈與慧脈並固，庶不負大師垂示之方便願力，云爾是爲序。

萬曆辛亥歲孟秋月

信州弟子劉崇慶和南題

## 博山和尚參禪警語卷之上

首座 成正集

### 示初心做工夫警語

做工夫最初要發箇破生死心，堅硬看破世界身心，悉是假緣，無實主宰，若不發明本具底大理，則生死心不破，生死心既不破，無常殺鬼念念不停，却如何排遣，將此一念作箇敲門瓦子，如坐在烈火簇中，求出相似，亂行一步不得，停止一步不得，別生一念不得，望別人救不得，當恁麼時，只須不顧猛火，不顧身命，不望人救，不生別念，不肯暫止，往前直奔，奔得出是好手。做工夫貴在起疑情，何謂疑情，如生不知何來，不得，不疑來處，死不知何去，不得，不疑去處，生死關竅不破，則疑情頓發，結在眉睫上，放亦不下，趁亦不去，忽朝撲破疑團，生死二字是甚麼閑家具，噯古德云：大疑大悟，小疑小悟，不疑不悟。做工夫把個死字貼在額頭上，將血肉身心，如死去一般，祇有要究明底這一念子現前，這一念子如倚天長劍，若觸其鋒者，了不可得，若淘磨鈍，則劍去久矣。做工夫最怕耽着靜境，使人困於枯寂，不覺不知動境人脈，靜境多不生厭，良以行人一向處乎喧鬧之場，一與靜境相應，如食飴食蜜，如人倦久喜睡，安得自知耶。外道使身心斷滅化爲頑石，亦從靜境而入，良以歲久月深，枯之又枯，寂之又寂，墮於無知與

木石何異，吾人或處於靜境，祇要發明衣線下一段大事，不知在靜境始得，於大事中求其靜相，了不可得，斯爲得也。

做工夫，要中正勁挺，不近人情，苟循情應對，則工夫做不上，不但做不上，日久月深，則隨流俗阿師無疑也。

做工夫，人擡頭不見天，低頭不見地，看山不是山，見水不是水，行不知行，坐不知坐，千人萬人之中不見有一人，通身內外只是一箇疑團，可謂攪渾世界，疑團不破，誓不休心，此爲工夫緊要。

何謂攪渾世界，無量劫來本具的大理，沈沈寂寂未嘗動着，要在當人抖擻精神，天旋地轉，自有波翻浪涌一段受用。

做工夫，不怕死不得活，只怕活不得死，果與疑情廝結在一處，動境不待遣而自遣，安心不待淨而自淨，六根門頭自然虛豁豁地，點着卽到，呼着卽應，何愁不活耶。

工夫做得上，如挑千斤擔子，放亦不下，如覓要緊的失物，相似若覓不着誓不休心，其中但不可生執，生着生計，執成病，着成魔，計成外，果得一心一意，如覓失物相似，則三種泮然沒交涉，所謂生心動念卽乖法體矣。

做工夫，舉起話頭時，要歷歷明明如貓捕鼠相似，古所謂不斬黎奴誓不休，不然則坐在鬼窟裡，昏昏沈沈過了一生，有何所益。

貓捕鼠，睜開兩眼，四脚撐撐，只要拿鼠到口始得，縱有鷄犬在傍，亦不暇顧，參禪者亦復如是。

只是憤然要明此理，縱八境交錯於前，亦不暇顧，纔有別念，非但鼠兼走却貓兒。

做工夫，一日要見一日工夫，若因循循循，百劫千生未有了的日子，博山當時插一枝香，見香了便云，工夫如前無有損益，一日幾枝香耶，一年若干許香耶，又云，光景易過，時不待人，大事未明何日是了，由此痛惜更多加策勵。

做工夫，不可在古人公案上，卜度妄加解釋，縱一一領略得過，與自己沒交涉，殊不知古人一語一言，如大火聚，近之不得，觸之不得，何況坐臥其中耶，更於其間分大分小，論上論下，不喪身失命者幾希。

此事不與教乘合，故久脩習大乘業者，不知不識，何況聲聞緣覺諸小乘耶，三賢十聖豈不通教，說此一事三乘膽戰，十地魂驚，等覺菩薩說法如雲如雨，度不可思議衆生，入無生法忍，尚喚作所知愚與道全乖，又何況其餘耶，蓋此事從凡夫地頓同佛體，人所難信，信者器不信非器，諸行人欲入斯宗乘者，悉從信而入，信之一字有淺有深，有邪有正，不可不辯，淺者凡入法門，誰云不信，但信法門非信自心，深者諸大乘菩薩尚不具信，如華嚴疏云，見有能說法者，有所聽法衆，尚未入乎信門，如云卽心卽佛，誰云不信，及乎問汝是佛耶，則支梧排遣，承當不下，法華云，盡思共度量，不能測佛智，何以有盡思度量之心，蓋信不具耳。

邪正者自心卽佛名正信，心外取法名邪信，卽佛要究明自心親履實踐，到不疑之地，始名正信，如顛頂儻侗猜三枚相似，但云心卽佛，實不識自心，卽名邪信。

古人摘桃便定去，鋤地便定去，作務時亦定，豈是坐久過捺，令心不起，然後爲定耶，若如此卽

名邪定，非禪者正意。

六祖云：那伽常在定，無有不定時。須徹見本體，方與此定相應。釋迦老子下兜率，降皇宮，入雪山，觀明星，開幻衆，未出此定。不然，則被動境漂溺，孰名爲定。

動境中求起處，不可得；靜境中亦求起處，不可得。動靜既無起處，將何爲境耶？會得此意，總是一箇定體，充塞彌互，無餘蘊也。

做工夫，不得沾着世法。佛法中尚沾着一點，也不得。何況世法耶？若真正話頭現前，履冰不見寒，踏火不見熱，荆棘林中橫身直過，不見有掛礙，始可在世法中橫行直撞。不然，盡被境緣轉將去，欲得工夫成一片，驢年也未夢見在。

做工夫，不可尋文逐句記言記語，不但無益，與工夫作障礙。真實工夫返成緣慮，欲得心行處絕，豈可得乎？

做工夫，最怕比量，將心湊泊，與道轉遠。做到彌勒下生去，管取沒交涉。若是疑情頓發的漢子，逼塞虛空，不知有虛空名字，如坐在銀山鐵壁之中，祇要得個活路，若不得個活路，如何得安穩去，但恁麼做去，時節到來，自有個倒斷。

近時有等邪師，教學者不在工夫上，又云：古人未嘗做工夫，此語最毒，迷悞後生，入地獄如箭射。

大義禪師坐禪銘云：切莫信道，不須參古聖孜孜爲指南，雖然舊閑閑田地，一度贏來得也未。若不須參究，便云得理，此是天生彌勒自然釋迦，此輩名爲可憐憫者，蓋自己不曾參究，或見

古人一問一答，便領悟去，遂將識情解將去，便誑妄於人，或得一場熱病，叫苦連天，生平解的，用不着，或到臨命終時，如螃蟹入湯鍋，手忙脚亂，悔之何及。

黃檗禪師云：塵勞迴脫，事非常緊，把繩頭做一場，不是一翻寒徹骨，爭得梅花撲鼻香。此語最親切，若將此偈時時警策，工夫自然做得上，如百里程途行一步，則少一步，不行祇住在這裏，縱說得鄉里事業，了了明明，終不到家，當得甚麼邊事。

做工夫，最要緊是個切字，切字最有力，不切則懈怠生，懈怠生則放逸縱意，靡所不至。若用心真切，放逸懈怠，何由得生？當知切之一字，不愁不到古人田地，不愁生死心不破，捨此切字，別求佛法，皆是癡狂外邊走，豈可以做工夫同日而語也。

切之一字，豈但離過，當下超善惡無記三性，一句話頭用心甚切，則不思善，用心甚切，則不思惡，用心甚切，則不落無記，話頭切無掉舉，話頭切無昏沈，話頭現前，則不落無記。

切之一字，是最親切句，用心親切，則無間隙，故魔不能入，用心親切，不生計度，有無等，則不落外道。

做工夫，人行不知行，坐不知坐，謂話頭現前，疑情不破，尚不知有身心，何況行坐耶？

做工夫，最怕思惟，做詩做偈，做文賦等，詩偈成則名詩僧，文賦工則稱文字僧，與參禪沒交涉。凡遇着逆順境緣，動人念處，便當覺破，提起話頭，不隨境緣轉，始得。或云：不打緊，這三箇字，最是悞人，學者不可不審。

做工夫，人多怕落空，話頭現前，那得空去，只此怕落空的，便空不去，何況話頭現前耶？

做工夫疑情不破，如臨深淵，如履薄水，毫釐失念，則喪身失命，爲疑情不破，則大理不明，一口氣不來，又是一生被中陰牽引，未免隨業識去，改頭換面，不覺不知，由此則疑上更添個疑，提起話頭，不明決定要明，不破決定要破，譬如捉賊，須是見賊始得。

做工夫，不得將心待悟，如人行路，住在路上，待到家，終不到家，只須行到家，若將心待悟，終不悟，只須逼拶令悟，若大悟時，如蓮花忽開，如大夢忽覺，良以夢不待覺，睡熟時自覺，華不待開，時節到自開，悟不待悟，因緣會合時自悟，余云：因緣會合時，貴在話頭真切逼拶令悟，非待悟耶？又悟時如披雲見天，而廓落無依，天旋地轉，又是一翻境界。

做工夫，要緊要正，要綿密，要融豁，何謂緊？人命在呼吸，大事未明，一口氣不來，前路茫茫，未知何往，不得不緊，古德云：如麻繩着水，一步緊一步，何謂正？學人須具擇法眼，三千七百祖師，大有樣子，若毫釐有差，則入邪徑，經云：唯此一事實，餘二則非真，何謂綿密？眉毛與虛空，厮結針筍不入，水洒不濕，不容有毫釐間隙，若有毫釐間隙，則魔境乘隙而入，古德云：一時不在，如同死人，何謂融豁？世界闊一丈，則古鏡闊一丈，古鏡闊一丈，則火爐闊一丈，決不拘執住在一處，捉定死蛇頭，亦不繫墜，在兩頭，淋漓蕩蕩，古德云：圓同太虛，無欠無餘，真到融豁處，則內不見有身心，外不見有世界，始得箇入頭。

緊而不正，則枉用工，正而不緊，則不能入，既入，須要綿密，始得相應，既相應，須要融豁，方爲化境。

做工夫，着不得一絲毫別念，行住坐臥，單單只提起本參話頭，發起疑情，憤然要討箇下落，若有絲毫別念，古所謂雜毒入心，豈但傷身命，此傷乎慧命，學者不可不謹。

余云：別念非但世間法，除究心之外，佛法中一切好事，悉名別念，又豈但佛法中事，於心體上，取之捨之，執之化之，悉別念矣。

做工夫，人多云做不上，即此做不上，便做去，如人不識路，便好尋路，不可云尋不着路，便休耶？如尋着路的，貴在行直至到家，乃可爾，不得站在路上，不行終無到家日子。

做工夫，做到無可用心處，萬仞懸崖處，水窮山盡處，羅紋結角處，如老鼠入牛角，自有倒斷也。做工夫，最怕的一箇伶俐心，伶俐心爲之藥忌，犯着些毫，雖真樂現前，不能救耳，若真是箇參禪漢，眼如盲耳如聾，心念纔起時，如撞着銀山鐵壁相似，如此則工夫始得相應耳。

工夫做得真切，將身心與器界，煉得如鐵槌子相似，只待渠爆得斷，卒得折，更要撮得聚，始得做工夫，不怕錯，只怕不知非，縱然行在錯處，若肯一念知非，便是成佛作祖底基本，出生死底要路，破魔網底利器也，釋迦大師於外道法，一一證過，祇是不坐在窠臼裏，將知非便捨四個字，從凡夫，只到大聖地位，此意豈但出世法，在世法中，有失念處，只消個知非便捨，便做得一個淨白底好人。

若抱定錯處，爲是不肯知非，縱是活佛現前，救他不得。

做工夫，不可避喧向寂，瞑目合眼，坐在鬼窟裏作活計，古所謂黑山下坐死水浸，濟得甚麼邊事，只須在境緣上做得去，始是得力處，一句話頭頓在眉睫上，行裏坐裏，着衣喫飯，裏迎賓待客，裏祇要明這一句話頭，落處，一朝洗面時，摸着鼻孔，原來太近，便得箇省力。

做工夫最怕認識神爲佛事，或揚眉瞬目，搖頭轉腦，將謂有多少奇特，若把識神當事，做外道奴，也不得。

做工夫正要心行處滅，切不可將心湊泊，思惟問答機緣等，洞山云：體妙失宗，機昧終始，便不堪共語也。若大理微時，一一三昧從自心中流出，思惟造作，何嘗霄壤也。

工夫不怕做不上，做不上要做上，便是工夫。古德云：無門解脫之門，無意道人之意，貴在體悉箇入處。若做不上，便打退鼓，縱百劫千生，其奈爾何。

疑情發得起放不下，便是上路。將生死二字貼在額頭上，如猛虎起來，若不直走到家，必喪身失命，猶可住脚耶。

做工夫祇在一則公案上用心，不可一切公案上作解會，縱能解得終是解非悟耶。法華經云：是法非思量分別之所能到。圓覺云：以思惟心測度如來圓覺境界，如將燈火熱須彌山，終不能得。洞山云：擬將心意學玄宗，大似西行却向東。大凡穿鑿公案者，須皮下有血識，慚愧始得。做工夫提起話頭，祇是知疑情打不破，必竟無第二念，決不可向經書上引證牽動識情，識情一動則妄念紛馳，欲得言語道斷，心行處滅，安可得乎。

道不可須臾離，可離非道也。工夫不可須臾間斷，可間斷非工夫也。真正參究人，如火燒眉毛上，又如救頭然，何暇爲他事動念耶。古德云：如一人與萬人敵，觀面那容眨眼看，此語做工夫最要，不可不知。

做工夫自己打未做，祇可辨自己事，不可教人。如人未到京城，便爲他人說京城中事，非但瞞

人，亦自瞞耳。

做工夫曉夕不敢自怠，如慈明大師，夜欲將睡，用引錐刺之，又云：古人爲道不食不寢，余又何人耶。

古人畫一石灰圈，道理不明，脚步不出圈內，今人縱意肆情，遊蕩不羈，謂之活潑，大可笑耳。

工夫或得輕安，或有省發，不可便爲悟也。博山當時看船子和尙沒踪跡句，一日因閱傳燈，見趙州囑僧云：三千里外逢人始得，不覺打失布袋，如放下千斤擔子，自謂大悟，逮見寶方，如方木逗圓孔，始具慚愧。若悟後不見大善知識，縱得安逸，終是未了。

寶方勉余偈云：空拶空兮功莫大，有追有也德猶微。誘他迦葉安生理，得便宜處失便宜。此是百尺竿頭進步句，禪僧輩不可不審。余嘗謂學者云：我得寶方不肯兩箇字，受用不盡。

做工夫不得作道理會，但硬硬參去，始發得起疑情。若作道理會，祇是乾爆爆底，豈但打不徹自己事，連疑情亦發不起。如人云：器中盛底是何物，實不是彼所指底物，彼以非爲是，便不能發疑，又不起疑，卽以彼物爲此物，以此物爲彼物，如此謬解，若不開器親見一回，則終其身而不可辨也。

做工夫不可作無事會，但憤然要明此理，若作無事會，一生祇是箇無事人，衣線下一件大事，終是不了。如人覓失物相似，若覓着了，若覓不着，便置在無事甲裏，無有覓意，縱然失物現前，亦當面錯過，蓋無覓物意耳。

做工夫不可作擊石火光會，若光影門頭瞥有瞥無，濟得甚事，要得親履實踐，親見一回始

得若真真得意，如青天白日之下，見親生父母相似，世間之樂事更無過者。

做工夫，不得向意，根下卜度，思惟卜度，使工夫不得成片，不能發得起疑情，思惟卜度四箇字，障正信障正行，兼障道眼，學者於彼，如生冤家相似，乃可耳。

做工夫，不得向舉起處承當，若承當正所謂瞞頂儻侗，與參究便不相應，只須發起疑情，打教徹，無承當處，亦無承當者，如空中樓閣，七通八達，不然認賊爲子，認奴作郎，古德云：莫將驢鞍橋喚作阿爺下頷，斯之謂也。

做工夫，不得求人說破，若說破，終是別人底，與自己沒相干，如人問路到長安，但可指路，不可更問長安事，彼一一說明長安事，終是彼見底，非問路者親見耶？若不力行，便求人說破，亦復如是。

做工夫，不祇是念公案，念來念去，有甚麼交涉，念到彌勒下生時，亦沒交涉，何不念阿彌陀佛，更有利益，不但教不必念，不妨一一舉起話頭，如看無字，便就無上起疑情，如看柏樹子，便就柏樹子起疑情，如看一歸何處，便就一歸何處起疑情，疑情發得起，盡十方世界是一箇疑團，不知有父母底身心，通身是個疑團，不知有十方世界，非內非外，滾成一團，只待彼如桶箍自爆，再見善知識，不待開口，則大事了畢，始撫掌大笑，回觀念公案，大似鸚鵡學語，亦何預哉？做工夫，不可須臾失正念，若失了參究一念，必流入異端，忘忘不返，如人淨坐，只喜澄澄湛湛，純清絕點，爲佛事，此喚作失正念，墮在澄湛中，或認定一個能講能譚，能動能靜，爲佛事，此喚作失正念，認識神，或將妄心遏捺，令妄心不起，爲佛事，此喚作失正念，將妄心捺，妄心如石壓。

艸，又如剝芭蕉葉，剝一重又一重，終無了底日子，或觀想身心如虛空，不起念，如墻壁，此喚作失正念，玄沙云：便擬凝心斂念，攝事歸空，即是落空亡外道，魂不散，底死人，總而言之，皆失正念故。

做工夫，疑情發得起，更要撲得破，若撲不破時，當確實正念，發大勇猛，切中更加個切字，始得徑山云：大丈夫漢，決欲究竟，竟此一段大事因緣，一等打破面皮，性燥，豎起脊梁骨，莫順人情，把自平昔所疑慮，貼在額頭上，常時一似欠人萬百貫錢，被人追索，無物可償，生怕被人耻辱，無急得急，無忙得忙，無大得大底，一件事方有趣向分。

評古德垂示警語

趙州云：三十年不雜用心，除着衣喫飯，是雜用心。

評：非不用心，不雜用心耳，所謂置之，一處無事不辨。

趙州云：汝但究理，坐看三二十年，若不截取老僧頭去。

評：趙州著甚死急，然雖如是，歲月長，討個三二十年，不異心者，也難得。

趙州云：老僧十八歲，便解破家蕩產，又云：我當時被十二時辰使，如今使得十二時。評：在家產上作活計，被十二時辰使，破得家產者，便使得十二時，忽有僧問：如何是家產，博山答曰：卸却皮囊，即向汝道。

趙州云：倘若一生不離叢林，不語五年十年，無人喚，爾作啞漢，已後佛也不奈爾何。評：不語，即是不雜用心，若不向衣線下究理，則太遠在。

天台詔國師云假饒答話揀辨如懸河祇成得個顛倒知見若祇貴答話揀辨有甚麼難但恐無益於人翻成賺悞。

評今時人學得一肚皮尋常問來問去將佛法爲戲具非但無益多成罪過而今恣閑言閑語以當宗乘看古人說話面皮厚多少。

國師云諸上座從前所學揀辨問答記持說道理極多爲甚麼疑心不息聞古人方便特地不會祇爲多虛少實。

評揀辨記持皆屬緣慮生死根不斷如何會得古人意所以云微言滯於心首返爲緣慮之場實際居於目前翻爲名相之境。

國師云上座不如從腳跟下一時覷破看是甚麼道理有多少法門與上座作疑求解始知從前所學底事祇是生死根源陰界活計所以古人道見聞不脫如水裡月。

評見聞緣慮誰人不有要有大轉變始得若不與工夫相應從水晶宮裡穿下過來終沒交涉古德云知解入心如油入麪永無出期不可不謹。

紹巖禪師云諸仁者今日國主致請祇圖諸仁者明心此外別無道理諸仁者還明心也未莫不是語言譚笑時凝然杜默時參尋知識時道伴商畧時觀山翫水時耳目絕對時是汝心否如上所解盡爲魔魅所著豈曰明心。

評語不是默不是見聞不是離見聞亦不是作麼生會卽今禪者莫亂統好。

巖云更有一類人離身中妄想外別認徧十方世界含日月包太虛謂是本來真心斯亦外道

所計非明心也。

評此喚作偏空外道又安得身心一如身外無餘耶卽今禪和子不曾遇人自作主宰多落斯見。

又諸仁者要會麼心無是者亦無不是者汝擬執認其可得乎。

評前二種是病過在執認二字上此段是藥但無是非執認病卽愈矣。

瑞鹿禪師云大凡參學未必學問話是參學未必學揀話是參學未必學代語是參學未必學別語是參學未必學捨破經論中奇特言語是參學未必捨破祖師奇特言語是參學若於如是等參學任徧七通八達於佛法中倘無見處喚作乾慧之徒豈不聞聰明不敵生死乾慧豈免苦輪。

評今時人類皆如是正所謂拋却真金拾瓦礫不肯真實參究恣口頭三昧如香嚴問一答十問十答百豈不是通達於佛法中無有見處父母未生前一句子便不奈何今時學語之流且道濟得甚麼邊事。

瑞鹿禪師云若也參學應須真實參學始得行時行時參取立時立時參取坐時坐時參取眠時眠時參取語時語時參取默時默時參取一切作務時一切作務時參取既向如是等時參且道參個甚麼人參個甚麼語到這裏須自有個明白處始得若不如是喚作造次之流則無究竟之旨。

評要切究此參底語是甚麼語參底人是甚麼人若不究此語不識此參底人是謂空過非參



學也。

芭蕉云，如人行次，忽遇前面萬丈深坑，背後野火來逼，兩畔是荆棘林，若也向前則墮在坑壑，若也退後則野火燒身，轉側則被荆棘林礙，當與恁麼時，作麼生免得？若也免得，有出身之路，若免不得，墮身死漢。

評：直須不顧危亡，始得個徹頭，稍生擬議，則喪身失命。芭蕉此語，最爲工夫緊要，學者多求知解，墮在玄奧窠臼裏，不向這裏留意，是謂空過一生。

### 博山和尚參禪警語卷之上終

### 博山和尚參禪警語卷之下

雲門云：有一般掠虛漢，食人涎唾，記得一堆一擔骨董，到處馳騁驢唇馬嘴，誇我解問，十轉五轉，饒爾從朝問到夜，論劫恁麼還曾夢見麼？

評：雲門當時正罵十者一二人而已，今時紛紛皆是，何曾向衲衣下體究，設或坐片嚮之時，不是昏沈，便是散亂，蓋爲一肚子落索，吐不去，割不斷，若是個伶俐的漢，纔聞恁麼舉，具大慚愧，始得。

雲門示衆云：諸兄弟，切莫容易過時，大須仔細。古人有葛藤相爲處，祇如雪峰道盡大地是汝自己，夾山道百艸頭上薦取老僧，鬧市裏識取天子，洛浦云：一塵纔起，大地全收，一毛頭獅子全身，總是汝把取，翻覆思量看，日久歲深，自然有個入處。

評：此三段語，牽爾入門，要爾肯入，不然盡在鬼窟裏作活計。爾若入得門，自然怙怙底，不見有山河大地，不見有自己，薦與不薦，是兩頭語。

雲門云：光不透脫，有兩般病，一切處不明，面前有物是，又透得一切法空，隱隱地似有個物相似，亦是光不透脫，又法身亦有兩般病，得到法身，爲法執不忘，已見猶存，坐在法身邊，是一，直饒透得法身去，放過卽不可，仔細點檢將來，有甚麼氣息，亦是病。

評：此病全在境量上作活計，不會坐斷，不會透脫，不會得轉身吐氣，這裏若別生異念，則成魔。

作怪有分在。

玄沙云：夫學般若菩薩，須具大根器，有大智慧始得。若有智慧，即便出脫得去。評：大根器者，一聞千悟得，大總持，說個出脫字，早是方便之辭也。何以故？從來不曾繫縛故。玄沙云：若是根機遲鈍，直須勤苦日夜，忘疲無眠，失食如喪考妣，相似，怎麼急切盡一生去，更得人荷挾，尅骨究實，不妨易得構去。且況如今誰是堪任學底人。

評：盡大地人都堪任，惟除無知不具信根者，纔是釋迦佛放光動地，其奈爾何。

玄沙云：仁者莫祇是記言語，恰似念陀羅尼相似，跣步向前來，口裏哆哆啣啣，被人把住詰問着，沒去處，便噴道：和尚不爲我答話，怎麼學事大苦知麼。

評：記言語者，謂之雜毒入心，礙正知見，世間讀書人，記文字多，便不能融化，何況究出世法，肯食他人涎唾耶。

玄沙云：有一般坐繩牀和尚，稱善知識，問着搖身動手，點眼吐舌瞪視。

評：此等之流，通身是魔，通身是病，到臘月三十日，未免闌去在。

玄沙云：更有一般說昭昭靈靈，靈臺智性，能見能聞，向五蘊身田裏作主宰，怎麼爲善知識，大賺人，知麼？我今問汝，汝若認昭昭靈靈，是汝真實，爲甚麼瞌睡時又不認昭昭靈靈，若瞌睡時不是，爲甚麼有昭昭時，汝還會麼？這個喚作認賊爲子，是生死根，妄想緣氣。

評：此是弄精魂漢，瞌睡時既做不得主，生死到來，作麼生折合，一生胡亂做去，豈但哄人，皆自哄耳。

玄沙云：汝今欲得出他五蘊身田主宰，但識取汝秘密金剛體，古人向汝道，圓成正遍，遍周沙界。

評：秘密金剛體，即圓成正遍，遍周沙界，分明向汝道，須是全身拶入始得。

玄沙云：佛道閑曠，無有程途，無門解脫之門，無意道人之意，不在三際，故不可昇沈，建立乖真，非屬造化。

評：若會得此意，不費纖毫功行，立地成佛，還多了箇成字。

玄沙云：動則起生死之本，靜則醉昏沈之鄉，動靜雙泯，即落空亡，動靜雙收，顯頂佛性。

評：行人多厭動取靜，靜久復思動，須剔起眉毛，打破動靜窠臼，始是道人用心也。

玄沙云：必須對塵對境，如枯木寒灰，臨時應用，不失其宜，鏡照諸像，不亂光輝，鳥飛空中，不雜空色。

評：如枯木寒灰，蓋無心，不失其宜，蓋應物，豈與灰心混智者同日而語哉，其不亂光輝，不雜空色，云云，自彼於我何爲。

玄沙云：所以十方無影像，三界絕行蹤，不墮往來機，不住中間意，箇中纖毫道不盡，即爲魔王眷屬，句前句後，是學人難處，所以一句當天，八萬門永絕生死。

評：此語貴在一句當天，八萬門盡十方世界，無纖毫空缺處，無纖毫影像，無纖毫行迹，可謂光燦燦活潑潑，佛祖衆生沒處安着，生死二字，是阿誰怎麼道。

玄沙云：直饒如秋潭月影，靜夜鐘聲，隨扣擊以無虧，觸波瀾而不散，猶是生死岸頭事。

評、坐禪人萬一不到恁麼田地，到得尙是生死岸頭事，須是自尋個活路始得。

玄沙云：道人行處，如火銷冰，終不却成冰。箭既離弦，無返回勢，所以牢籠不肯住，呼喚不回頭，古聖不安排，至今無處所。

評：道人之心合當如是，但將此段細抹，將來自然省力，沾連些兒不得。若將識心湊泊，正所謂因地不真，果招迂曲。

玄沙云：今時人不悟箇中道理，妄自涉事涉塵，處處染着，頭頭繫絆，縱悟則塵境紛紜，名相不實。

評：處處染着，頭頭繫絆，只是究心不切，命根不斷，不肯死去，真正參學人，如過蠱毒之鄉，水也不可沾着一滴，始得箇徹頭。

玄沙云：便擬凝心斂念，攝事歸空，閉目藏睛，纔有念起，旋旋破除，細想纔生，即便遏捺，如此見解，即是落空亡外道，魂不散底死人，冥冥漠漠，無覺無知，塞耳偷鈴，徒自欺誑。

評：病在不起疑情，不究公案，不肯全身入理，只是將識心遏捺，縱是澄澄湛湛，畢竟命根不斷，終不是做工夫人。

玄沙云：仁者莫祇長戀生死愛網，被善惡業拘將去，無自由分，饒汝鍊得身心，同虛空去，饒汝到精明湛不搖處，不出識陰，古人喚作如急流水，流急不覺妄爲恬靜。

評：識心不斷，縱鍊得身心如虛空，終被惡業牽引去，精明湛不搖處，正是識陰，如何免得生死，總而言之，不究徹大理，悉是虛妄。

玄沙云：恁麼修行，盡出他輪迴，不得依前被輪迴去，所以道：諸行無常，直是三乘功果，如是可畏，若無道眼，亦不究竟。

評：總收上數段法語，皆非究竟，三乘行人縱行六度萬行，皆生滅法，於實際理地，且喜沒交涉。徑山云：今時有一種外道，自眼不明，只管教人死猶狙地，他去歇去，若如此休歇，到千佛出世，也休歇不得，轉使心頭迷悶耳。

評：不肯起疑情，則命根不斷，命根既不斷，休亦不去，歇亦不得，卽此休歇二字，便是生死根本，縱百劫千生，終無了底日子。

徑山云：又一人，教人隨緣管帶，忘情默照，照來照去，帶來帶去，轉加迷悶，無有了期。評：既有能帶之心，所照之境，能所對立，非妄而何？若以安心爲參究，便於自心，不得自在，只須坐斷兩頭，能所不立，則礙膺之物，如桶底脫矣。

徑山云：又一人，教人是事莫管，但只恁麼歇去，歇得來，情念不生，到恁麼時，不是冥然無知，直是惺惺歷歷，這般底，更是毒害瞎却人眼，不是小事。

評：只饒到惺惺歷歷，此是對寂之法，非參究耶？若參究直欲發明大事，既不如是，豈非毒害者哉。

徑山云：不問久參先達，若要真個靜，須是生死心破不着，做工夫，生死心破，則自靜哉。

評：疑情發得起，則生死心凝結在一處，疑情破，則生死心破，於此破處，求其動相了不可得。

示疑情發不起警語

做工夫疑情發不起，便欲尋行數墨，檢討文字，廣求知解，將佛祖言教，一串穿過，都作一箇印子印定，纔舉起一則公案，便作道理會去，於本參話頭上，不能發起疑情，逢人難問着，則不喜。此是生滅心非禪也。或隨聲應答，緊指擎拳，引筆疾書，偶顯開示，使人參究，亦有意味，自謂得大悟門，殊不知疑情發不起，皆是識心使然。若肯一念知非，全身放下，見善知識，求箇入路，則可。不然生滅心勝久之，則成魔着，殆不可救。

做工夫疑情發不起，於境緣上生厭離，喜到寂靜無人處坐去，便覺得力，便覺有意思，纔遇着些動處，心即不喜，此是生滅心非禪也。坐久則與靜境相應，冥然無知，絕對對待，縱得禪定，凝心不動，與諸小乘何所異哉。稍遇境緣，則不自在，聞聲見色，則生怕怖，由怕怖故，魔得其便，由魔力故，行諸不善，一生脩行，都無所益，皆是最初不善用心，不善起疑情，不肯見人，不肯信人，於靜謐處強作主宰，縱遇善知識，不肯一念知非，千佛出世，其奈爾何。

做工夫疑情發不起，將情識妄想心遏捺，令安心不起，到無起處，則澄澄湛湛，清純清絕，此識心根源終不能破於澄湛絕點處，都作個工夫理會，纔遇人點着痛處，如水上捺葫蘆，相似，此是生滅心非禪也。蓋爲最初不肯參話頭起疑情，縱遇捺得身心不起，如石壓艸，若死得識心，成斷滅去，正是落空亡外道。若斷滅不去，逢境緣時，即引起識心，於澄湛絕點處，便作坐解，自謂得大悟門，縱則成狂，着則成魔，於世法中，誑妄無知，便起深孽，退人信心，障菩提道。

做工夫疑情發不起，將身心器界悉皆空去，空到無管帶處，無依倚處，不見有身心，不見有世界，非內非外，總是一空，謂空便是禪，謂空得去便是佛，行也是空，坐也是空，空來空去，行住坐

臥，如在虛空中行，此是生滅心非禪也。不着則成頑空，冥然無知，着則成魔，自謂大有悟門，殊不知與參禪沒交涉。若真是個參禪漢，發起疑情，一句話頭如倚天長劍，觸其鋒者，即喪身失命。若不如是，只饒空得一念不起時，只喚作個空無所知，非究竟耶。

做工夫疑情發不起，遂將識心揣摩，把古人公案，胡亂穿鑿去，謂是全提，謂是半提，謂是向上，謂是向下，是君是臣，是兼帶語，是平實語，自謂見解人所不及，縱一一說得道理，與古人一口吐氣，此是生滅心非禪也。殊不知古人一語一言，如嚼綿絮，團使人吞不下吐不出，豈肯與人生出幾多解路，引起人識心耶。若疑情發得起，全身拶入去，此解路識心，不待備死去，自然枯枯地。

做工夫疑情發不起，將身心看破，純是假緣，其中自有一物往來，能動能靜，無形無相，於六根門頭放光動地，散則遍周沙界，收則不立纖塵，向這裏一認認定，不肯起疑情，不肯參究，便謂了事人，此是生滅心非禪也。殊不知生死心不破，將此等爲快意，正是弄識神，一朝眼光落地，便作不得主，隨識神牽引去，隨業受報去，若善業多，則生在人間天上，到四相五衰逼將來，便謂佛法無靈驗，由此謗法，墮在地獄餓鬼道中，出得頭來，知是幾多劫數，以此觀之，參禪全要見人，若自作主宰，總用不着。

做工夫疑情發不起，便認定箇眼能見，耳能聞，舌能譚，鼻能嗅，手能執着，脚能運奔，是自己一靈真性，向這裏度量，謂是悟門，逢人則瞪眼側耳，手指脚踢，以爲佛法，此是生滅心非禪也。古人喚作如發癩病相似，又云在曲盤牀上，弄鬼眼睛相似，弄來弄去，弄到四大分散時，則弄不

去更有一等惡見，以此爲奇特，遞代相傳，受人供養，無慚無愧，逢人問法，則大喝一聲，大笑一場，殊不知從來未曾參究，命根未斷，縱行善事，都是魔業，非究竟耶。

做工夫，疑情發不起，便欲做有爲功行，或做解脫，或行苦行，冬不爐，夏不扇，人來乞衣，便全身脫去，甘心凍死，謂之解脫，人來乞食，便自己不食，甘心餓死，謂之解脫，更有種種，不可具說，總而論之，皆是勝心所使，誑惑無知，彼無知者，謂是活佛，謂是菩薩，盡其形命，承事供養，殊不知佛戒中謂之惡律儀業，雖是持戒步步結罪，又有一等，燒身燃臂，禮佛求懺，謂之功課，於世法中亦是好事，參究分中當得甚麼事，古德云：切莫向他機境上求，謂禮佛是機境，求懺是機境，佛法中一切好事，悉機境也，不是教爾不行此一切善事，但用心一處，此一切善事，悉能助發，滋培善根，他日道眼忽開，燒香掃地，皆佛事耳。

做工夫，疑情發不起，便欲散誕去，便欲活潑去，逢人則自歌自舞，自歡自樂，或水邊林下吟咏笑談，或市井街坊橫行直撞，自謂是個了事人，見善知識，開叢林，立規矩，或坐禪，或念佛，或行一切善事，則撫掌大笑，生輕慢心，誇瀆心，自不能行道，障人行道，自不能誦經禮懺，障人誦經禮懺，自不能參禪，障人參禪，自不能開叢林，障人開叢林，自不能說法，障人說法，凡有善知識出世，設幾個難問，向人天衆前，多答一句，多問一句，喝一聲，打一掌，善知識見彼做鬼戲相似，或不理會，他便向人道：某善知識不會這個道理，苦哉苦哉，此是生滅心勝久之，則攝入魔道，造無窮深孽，受魔福盡，墮無間獄，雖是善因而招惡果，悲矣。

做工夫，疑情發不起，覺得同衆人，動止不便，太拘束，太煩紊，便欲向深山無人處，住靜去，或向

一間房屋裏住靜去，初則硬作主宰，閉目凝心，跏趺合掌，硬硬做去，或一年二年，一月兩月，不見下落，又有一等，坐得三兩日，便坐不住，或看書或散誕，或做偈做詩，或關門打睡，外現威儀，內成流俗，更有一等惡少年，不識廉耻，不信因果，潛行貪欲，逢人則恣口肆意，誑妄無知，自言我曾見善知識來，我得上人法，使無知者信受，與彼通好，或結爲道友，或招爲徒弟，上行下效，自不知非，不肯返省，不肯見人，妄自尊大，妄語成，此輩名爲可憐憫者，今時厭大衆，求私室，寧不寒心者哉，若真正學道人，慎勿萌此念，正好向衆人中，參究彼此警覺，縱不悟道，決不陷到這般田地，學者不可不警也。

示疑情發得起警語

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，見盡大地光皎皎地，無絲毫障礙，便欲承當個事，不肯撒手，坐在法身量邊，由此命根不斷於法身中，似有見地，似有受用，殊不知全是子想，古人喚作隔身句，既命根不斷，通身是病，非禪也，到這裏，只須全身拶入承當箇大事，亦不知有承當者，古德云：懸崖撒手，自肯承當，絕後再甦，欺君不得，若命根不斷，全是生滅心，若命根斷去，不知轉身吐氣，喚作墮身死漢，非究竟耶，這些子道理，不難會，自是行者不肯見人，若遇着善知識，磕着痛處，當下知歸，其或未然，則伏尸萬里也。

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，攪渾世界，得波翻浪湧一段受用，行人就着此受用，推不向前，約不退後，由此不得全身拶入，如貧人遇着座黃金山相似，了了明明，知得是金，不能隨手得用，古人喚作守寶漢，通身是病，非禪也，到這裏，只須不顧危亡，始得與法相應，天童所謂

普周法界，渾成飯，鼻孔纍垂，信飽參，若不得鼻纍垂，如坐在飯籬邊，餓殺大海裏，渴殺濟得甚麼邊事，所以道，悟後只須見人，如古德悟後見善知識，大有樣子，若自承當個事，不肯遇人，袖釘拔楔，皆喚作自欺底漢耳。

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，看山不是山，見水不是水，盡大地逼塞塞地，無纖毫空缺處，忽生一個度量心，似障了面前，障了身心，提亦不起，撲亦不破，提起似有，放下似無，開口吐氣不得，移身換步不得，正恁麼時，亦不得到這裏，通身是病，非禪也，殊不知古人用心純一，疑情發得起，看山不是山，見水不是水，不生度量心，不起別念，硬硬逼拶去，忽朝打破疑團，通身是眼，看山依舊山，見水依舊水，山河大地從甚麼處得來，求纖毫悟迹，了不可得，到恁麼田地，只須見人，若不見人，枯木巖前岐路中，更有岐路，到此不蹉跎，不被枯木椿絆倒者，博山與他結個同參。

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，便沈沈寂寂去，休去歇去，一念萬年去，將疑情鈍置，法身理中不得受用，一向死去無回互，無管帶，沒氣息，全被死水裏浸殺，自謂之極則，通身是病，非禪也，石霜會下，如此用工者，極多，縱坐脫立亡，不得受用，若受得鉗錘，知得痛痒，轉得身，吐得氣，便是人，若不知痛痒，雖會得法身句，只饒坐斷十方，有甚用處，天童所謂坐斷十方，猶點額密移一步看飛龍，古人大有警語，爲人處，大有葛藤相委悉，自是人不肯打徹，欲學善知識，在人叢馬踏之中，千自由百自在，得不難乎。

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，坐到湛不搖處，淨裸裸赤灑灑，沒可把，便放身去，不識得轉位就機，向這裏強立主宰，滯在法身邊，通身是病，非禪也，洞山云，峯巒挺異，鶴不停機，靈木迢然，風無依倚，當知峯巒靈木四個字，太煞玄奧，不是乾爆炸地，不停無依四個字，太煞活潑，不是死猶狃地，若不究到玄奧處，則不知入理之深，若不到活潑處，則不識旋機之妙，道人用心，用到無可用處，正好見人打翻漆桶，得箇徹處，豈可抱愚守株，滯在一隅，甘心做籠中之鶴，退毛之鳳哉。

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，面前隱隱地，似有個物相似，將此隱隱地，疑來疑去，椿定個前境，使自謂入得法身理，見得法界性，不知此等捏目所成，通身是病，非禪也，若真個入理之人，世界闊一丈，古鏡闊一丈，橫身當宇宙，求其根塵器界，了不可得，又將何爲身，將何爲境，將何爲物，將何爲隱隱地，雲門亦指出此病，尚有多文，若明得此一種病，則下之三種病，渙然冰釋矣，博山嘗謂學者曰，法身中病最多，只須大病一場，始識得病根，假饒盡大地人參禪，未有一個不受法身病者，惟除盲聾瘡啞者，不在此限。

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，見古人道，盡大地是沙門一隻眼，盡大地是自己一點靈光，盡大地在身己一點靈光裏，又引教中道，一塵中含無邊法界真理，便向這裏領略去，不肯求進益，生不得死不得，將此解路，謂之悟門，通身是病，非禪也，殊不知縱與理相應，若打不脫，全是理障，墮在法身邊，何況被解心牽引，不能入理之深，這個獼猴，子捏不死，既死不去，又安得絕後再甦耶，當知最初發疑情，便要與理相應，既與理相應，要得個深入，既得個深入，須向萬仞巖頭翻筋斗，打將下來，擺手出漳江，始是大人用心也，不然盡是掠虛漢，非當家種草也。

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，行住坐臥，如在日色裏，如在燈影裏，淡淡地沒滋味，或更全身放下，坐到水澄珠瑩之際，風清月白之時，正恁麼時，依正報中都成一片境，去清清淨淨，伶伶俐俐，自謂之究竟，不得轉身吐氣，不得入鄺垂手，又不肯求人決擇，或向淨白界中，別生出異念，謂之悟門，通身是病，非禪也。天童所謂清光照眼，似迷家，明白轉身，猶墮位，良以清光照眼，豈非水澄珠瑩，風清月白乎？明白轉身，更進一步，只消似迷墮位，四箇字，一印印定，行人到此，又作麼生區處？只須有大轉變，拈一莖艸，作丈六金身，用未爲分外，不然是釘椿搖櫓，漁父棲巢，喚作沒血氣漢，打死千個萬個，有甚麼罪過？

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，於法身邊，生奇特想，見光見華，見種種異相，便作聖解，將此殊異之事，銜惑於人，自謂得大悟門，殊不知通身是病，非禪也。當知此等殊異境界，或是自己妄心凝結而成，或是魔境乘隙而入，或是帝釋天人變化試現，妄心凝結者，如脩淨土人，觀想不移念，忽見佛像菩薩像等，如十六觀經中說，悉與淨土理合，非參禪要門，乘隙而入者，如楞嚴經中，五蘊空時，行人心有所着，魔即隨意而現，變化試現者，如菩薩修行時，帝釋化身現，無頭鬼無五臟鬼，菩薩無怖畏心，復現美女身，菩薩無愛染心，復現帝釋身，禮拜云：「太山可崩，海水可竭，彼上人者，難動其心。」故云：野人伎倆，有盡，老僧不見，不聞無窮。若真參學人，縱白及交加於前，無暇動念，何況靜定中，不實境相耶？既與理相應，則心外無境，能觀心所現境，又安在甚麼處？

做工夫，疑情發得起，與法身理相應，覺得身心輕安，動轉施爲，不相留礙，此是正偏道交，四大調適，譬爾如是，非究竟耶？彼無知者，便放下疑情，不肯參究，自謂得大悟門，殊不知命根不斷，縱能入理，全是識心，以識心卜度，通身是病，非禪也。爲入理不深，轉身太早，雖有深知，不得實用，縱得活句，正好向水邊林下，保養含蓄，切不可躁進，便欲爲人，妄自尊大，當知最初用心，疑情發得起，結在一團時，只待渠自己逃開，始得受用，不然稍有理致，便放下疑情，這裏定是死不去，定是打不徹，一生虛過，有參禪之名，無參禪之實，只饒入鄺垂手，不妨更見大善知識，彼善知識者，是大醫王，能療重病，是大施主，能施如意，切不可生自足想，不欲見人，當知不肯見人，爲執己見，禪中大病，無過此者。

示禪人參公案警語

示董巖達空禪者

通達虛空，翻白浪，好把家私都破蕩，有眼不見有耳聾，赤肉團中加痛棒，從教白醜口邊生，佛法塵勞一坦平，正念針鋒箭不入，面皮鐵鑄沒人情，非禮莫教輕動步，舉止安庠要回互，謾將知見妄疎親，拶碎疑團須妙悟，不破疑團誓不休，放出瀉山水牯牛，一朝驀鼻穿歸也，迥地遮天這一頭。

示峯頂智建禪者參無字公案

狗子佛性無，當下絕親疎，如入千尋浪，惟求赤尾魚，有角非關鯉，無鬚不是渠，有無俱勦絕，直探驪龍珠，又如四面火，前方一線餘，退步卽燒殺，橫趨亦喪軀，烈燄非停止，求生莫待徐，如入九重淵，如憑萬仞虛，用意切如此，管取發靈樞，更有前程路，水到自成渠。

示知白禪者參乾屎橛公案

如何是佛乾屎橛，大千世界一團鐵，渾身坐在鐵團中，不得出時向誰說，白禮拜，復云：莫禮拜，只饒出得時，領取三十棒。

示智輝禪者參一句話頭在甚處起公案

一句話頭甚處起，滄海只教乾到底，一句話頭甚處去，春風觸着珊瑚樹，不究去，只究起，石陷崖崩聳兩耳，十二時中步不移，如在及鋒求住止，只須勦斗打將來，靜陸平原方步武，男兒立志若如斯，誰道搏龍併拏虎，有問臺山路若何，遙指前村驀直去。

示心陽居士參沒踪跡公案

沒踪跡，莫藏身，豎起脊梁，祇麼行，鐵壁银山俱靠倒，幾回歡喜幾回嘆，藏身處沒踪跡，休向虛空尋鳥跡，放下娘生鐵面皮，蒺藜傾出黃金汁，返復看不教多管，甚衆生與佛魔，只教一口都吞盡，滴水翻成幾丈波，行也參，坐也究，踢破指頭俱漏逗，倒騎鐵馬上須彌，一生不着隨人後。

示照監院看萬法歸一公案

萬法歸一，一歸何處，豎起眉毛，如大火聚，生與同生，死與同死，行與同行，住與同住，頓起疑情，莫生怕怖，如臨大敵，不暇他顧，逢逆順境，須善回互，歸處不知肯隨他務，撞破鐵圍山，踞踞寶藏庫，瞬目與楊眉，全機彰露布，青州布衫重七斤，門前依舊桃千樹。

示普週禪者參念佛公案

一句阿彌陀，如珠投濁水，珠投水自清，佛念妄即止，水自清，髮鬚可鑑，絕纖塵，依稀識得娘生

面，展似眉毛作麼生，妄即止，萬里澄潭不見底，碧玻璃上珊瑚枝，雪老水枯祇這是，祇這是念即空，三更初夜日通紅，寶池金地蓮花國，萬派全歸指顧中，指顧中空此念，念念空空念成一片，十萬程途當下知，根塵陰界摩尼殿，摩尼殿光皎皎，佛法塵緣都照了，轉位旋機事若何，噫，生也不道，死也不道。

示觀如禪者看父母未生前公案

父母未生前誰是本來面，放下鏡心肝，提起吹毛劍，世法及塵緣，如蠟入猛燄，無量妙法門，參禪最靈驗，單提句話頭，不墮諸方便，萬別與千差，都來融一念，萬仞巖前湛水淳淳，一帶晴空閑雲片片，到此則心月孤圓，敢曰靈明顯現，光吞萬境，境非光，却笑澄江淨如練，非如練，祇一線，更須入火重烹煉，穴細金針露鼻時，蘇州布也揚州絹，參。

示宗妙禪者以千日期參公案

善造道者千日功，趣向如吞栗棘蓬，淨白界中纔一念，須彌山隔在其中，一句話頭如鏡，概佛法塵勞都屏絕，昏沈散亂成團去，只須切上重加切，千日如同頃刻間，意路心思絕，往還放開兩足超然上，烈火層冰總是閑，全身拶入無生國，妙出有無之軌，則逼塞虛空，不顧人，始知大地如漆黑，翻身拄杖活如龍，透海穿山振古風，此是日旋三昧力，法界空端用不窮，更有向上末後句，玄妙機微都不是，不向如來行處行，男兒自有冲天志。

答六雪關主問參公案，行人話頭真切，不落楞嚴五蘊魔外

約觀楞嚴五十種魔事，不出一個着字，如色陰明白鎖落諸念，乃至是人則能超越劫濁，觀其



所由堅固妄想以爲其本，卽此堅固妄想便不能融化，於妄想中精研見希奇之事，便作聖解，豈非着耶？如不作聖解，名善境界，不作卽不着耳。又五蘊中總以妄想二字結之，最初一着便不能破，卽此妄想便是魔之根蒂，其根本不除，挫其枝葉，令其不生可乎？甚乃利其虛明，食彼精氣，悉妄想牽合，非魔從外來，苟涉于慎護，正所謂雪上加霜，火上益油耳。如受陰中虛明妄想，虛明亦妄想，蓋最初未到求心不有之地，非妄而何？如想陰中融通妄想，最初章云：心愛圓明，卽前妄根與境融通，便生愛着，十種悉云：心愛等，蓋天魔從圓境中來，與愛心偶合，作無邊魔業，安可救也。良以行人最先坐斷此一念無心，卽無愛，無愛則着之一字何有耶？只如第九章云：心愛入滅，貪求空等，悉是魔業，亦最初妄心不破，正所謂蒸沙作飯，沙非飯本耶？如行陰中幽隱妄想，蓋行陰乃遷流不止爲性，故云生滅根元從此披露，爲想陰盡微見行陰中根元，悉是生滅念念不停，行人不隨生滅遷流，故得凝明正心，爾時天魔不得其便，但於圓元中起計度，故窮其始末，有因無因等，既有計度，亡正徧知，計之一字從幽隱中來，文云：觀彼幽清，不能徹見源底也。如識陰中顛倒妄想，謂同分生機倏然墜烈，六根虛靜，無復馳逸，虛靜爲不馳逸，不馳逸爲行陰盡耳。行陰既盡，見聞通鄰，互用清淨，故云：窮諸行空，尙依識元，乃至精妙未圓，便生勝解，此十種悉以識心而生勝解，既作勝解，遠圓通生諸種類矣。禪門中善用心者，俱不相涉，思大云：十方諸佛被我一口吞盡，何處更有衆生可度？此是佛祖位中留渠不住，邪魔外種其奈爾何？欲得不受其蝕，但全身入理，不待遣不待護，妄想念盡，則魔業自盡矣。古德云：便好和根下一斧，免教節外又生枝。

答不執脩證不廢脩證問

吾宗門下，毋論利鈍賢愚，但以信而入，既發起猛利心，如坐在鐵壁銀山，祇求進出，諸妄想心悉不能入，觀照功行安將寄乎？果得一念迸開，如披雲見天，如獲故物，觀照功行亦何所施？祇貴參究之念甚切，其參究亦涉于功行，但不以功行立名，如看破世緣，切究至道，亦涉于觀照，但不以觀照立名，如圓覺云：惟除頓覺人，并法不隨順，若以觀照爲事，則有能觀能照之心，必有所觀所照之境，能所對立，非妄而何？所以禪宗云：獨踏大方心外無境，將十方世界泊父母身心融成一箇坐，斷兩頭始得個入門，向上一路更須自看，不然盡是鬼家活計，安可以脩證同日而語耶？果顛頂不到此地，卽名自欺，此輩名爲可憐愍者，寧堪齒錄也。南嶽云：脩證卽不無，汙染卽不得，卽此不汙染之脩，可謂圓脩，還着得箇脩字麼？卽此不汙染之證，可謂圓證，還着得箇證字麼？如此則終日脩而無脩，掃地焚香，悉無量之佛事，又安可廢，但不着脩證耳。九地尙無功用行，況十地乎？乃至等覺說法如雨如雲，猶被南泉呵斥，與道全乖，況十地觀照與宗門而較其優劣可乎？

示參禪偈十首

參禪須鐵漢，毋論期與限，咬定牙齒關，只教大事辨，猛火熱油鑪，虛空都煮爛，忽朝撲轉過，放下千斤擔。

參禪莫論久，不與塵緣偶，剔起兩莖眉，虛空顛倒走，須彌碾成末，當下追本有，生鍊金汁流，始免從前咎。

參禪莫莽鹵，行誼要稽古，一條弦直心，不遭岐路苦，拶碎黃龍關，拈却雲門普，這箇破落僧，從來不出戶。

參禪沒主宰，祇要心不改，萬業及塵勞，旋空誰做保，堅硬可擎天，勇決堪扞海，雖然未徹頭，管取前程在。

參禪須審細，莫把工程計，有條便扳條，無條即扳例，不親佛與祖，管甚經和偈，都來一口吞，心空始及第。

參禪發正信，信正魔宮震，片雪入紅爐，赤身遊白及，只尋活路上，莫教死水浸，大散關忽開，倒跨毘盧印。

參禪休把玩，倏忽時光換，至理及玄奧，秦時鍛鑠鑽，咄哉丈夫心，着手還自判，百年能幾何，莫待臨行亂。

參禪無巧拙，一念貴超越，識得指上影，直探天邊月，劈開胸見心，刮去毛有血，分明舉似君，不會向誰說。

參禪須趁早，莫待年紀老，耳聾眼朦朧，朝在夕難保，生平最樂事，到此都潦倒，佛法本無多，祇要今時了。

參禪莫治妄，治妄仍成障，譬欲得華鯨管，甚波濤漾，至體絕纖塵，妄心是何狀，謹白參禪者，斯門真可尚。

博山和尚參禪警語卷之下終

大正八年十月十七日印刷  
 大正八年十月廿五日再版印刷  
 大正十年九月三十日再版發行

【國譯禪宗叢書】 第參卷

東京市神田區錦町一丁目十六番地

國譯禪宗叢書刊行會

編輯者兼

右代表者

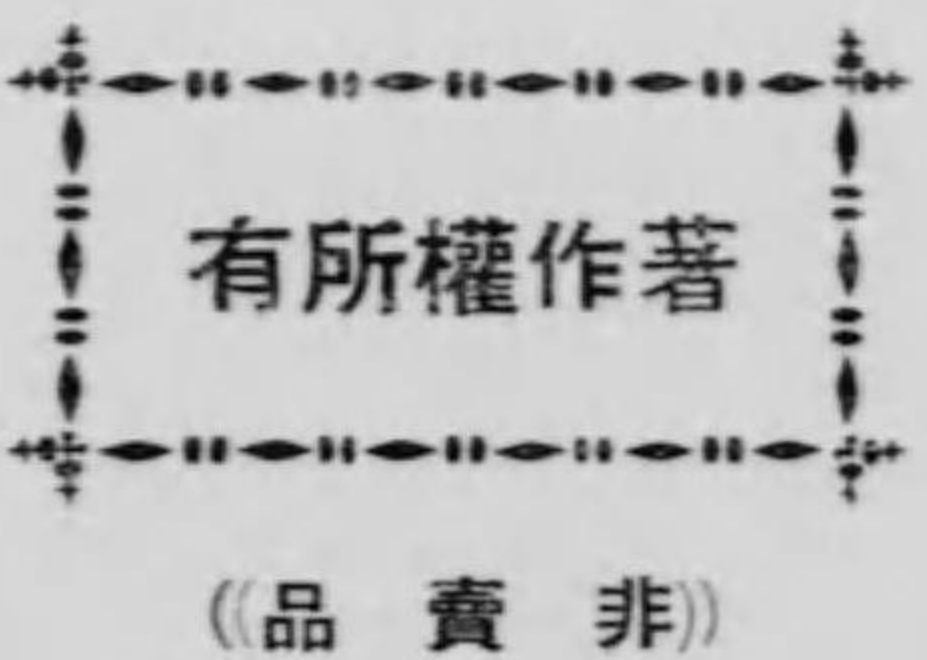
宮 下 軍 平

印刷者

東京市神田區錦町三丁目一番地  
中 島 藤 太 郎

印刷所

東京市神田區錦町三丁目一番地  
神 田 印 刷 所



發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番地(二松堂書店內)

國譯禪宗叢書刊行會

電話神田二四七八番  
振替東京四六〇一六番

379  
120



終